太棟

特輯　文樂座東京出開張

昭和十六年三月廿八日　第三種郵便物認可

昭和十七年六月廿三日　印刷納本
昭和十七年六月廿五日　發行

（毎月一回廿五日發行）

太棟

第百三十六號

野澤道之助待合を始めた
三度に一度は行かずばなるまい
ズンベラ〳〵

向島にて十六島田が出て來てサアビス
酒も梅よし行かずばなるまい
ズンベラ〳〵

本所區向島須崎町九五
御待合　梅よし
電話墨田四七五五番（シチイゴ）
水島春枝

道順（須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲つて二軒目）

淺草區雷門二丁目一九
淺草宅　野澤道之助
電話淺草三七九（ミナク）番

幸松

すき燒
和洋御料理

淺草公園（千束二ノ三四）
牛鍋本店
電話根岸（〇三八〇番 三〇〇〇番）

風流・金ぷら・茶漬
（美地句）

新橋二ノ八
電銀二〇八

感謝狀

今次大東亞戰爭ニ際シ出動軍隊慰問ノ爲恤兵品ノ御寄附ヲ辱ウシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス

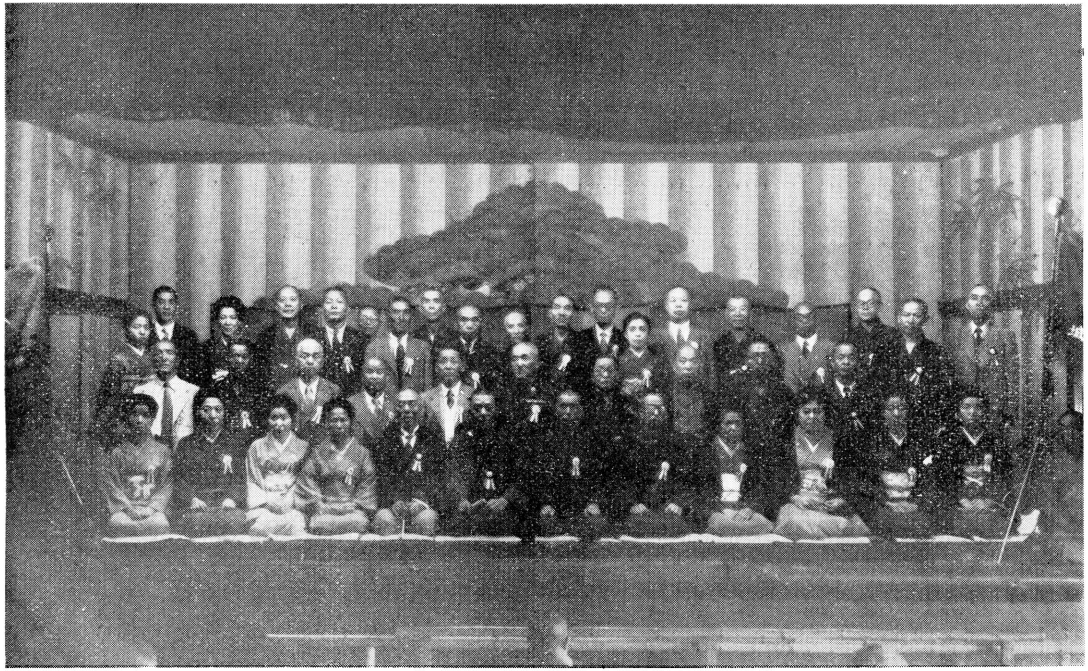
昭和十七年三月

陸軍大臣 東條英機

太樟社殿

近江清華・齋藤山生・白井清華氏の御厚意に依る

靜岡縣人義太夫靜淨會第四回大會



照　參　事　記

歴代櫓下

文樂座になつてから十代。櫓下の呼稱が正しく、紋下は近頃の俗稱。

第一代——竹本長門太夫　三代目長門太夫で、長門の文字は國名と混同の故を以つて差留められ後「長登」と改む。長登太夫の不在中、綱太夫(四代目)、巴太夫(三代目)兩人が一時櫓下を預り、長登太夫が文樂座へ戻ると、兩人は庵へ下がつて長登太夫が本櫓下に直つた。

第二代——竹本染太夫（六代目）

第三代——豊竹湊太夫（五代目）　明治五年稻荷境內より松島へ移轉直後。

第四代——竹本春太夫（五代目）

第五代——竹本實太夫（四代目）　後に四代目長門太夫となる。

第六代——竹本越路太夫（二代目）　後に六世竹本春太夫竹本攝津大掾なり。

第七代——竹本津太夫（二代目）　通稱法善寺、先頃死去した三代目津太夫、今回新に櫓下となつた二世豊竹古靱太夫の師匠で、明治廿二年、時の櫓下竹本越路太夫上京中文樂座に踏み止まり一座を護つた功により明治廿四年本櫓下となる。

第八代——竹本越路太夫（三代目）

第九代——竹本津太夫（三代目）

第十代——豊竹古靱太夫（二代目）　昭和十七年一月就任

文樂座略歴

□**竹本座創立**　現今より二百五十七年以前、貞享元年二月（道頓堀西の芝居）

□**文樂座發祥**　現今より約百五十年以前、天明年間淡路より植村文樂軒大阪へ來る

□**第一次稻荷社內時代**　文化八年より天保十三年に至る

□**西横堀新築地濱時代**　天保十四年より安政三年に至る

□**第二次稻荷社內時代**　安政三年より明治四年に至る

□**松島千代崎橋時代**　明治五年より明治十七年に至る

□**御靈神社內時代**　明治十七年より明治四十二年に至る

□**松竹合名社繼承**　明治四十二年三月植村家より繼承

□**御靈文樂座燒失**　大正十五年十一月二十九日

□**隨時興行時代**　昭和元年より昭和四年まで道頓堀辨天座を始め其他隨時興行

□**四ツ橋文樂座創立**　昭和四年十二月以來現在に至る

太棹　第百三十六號目次

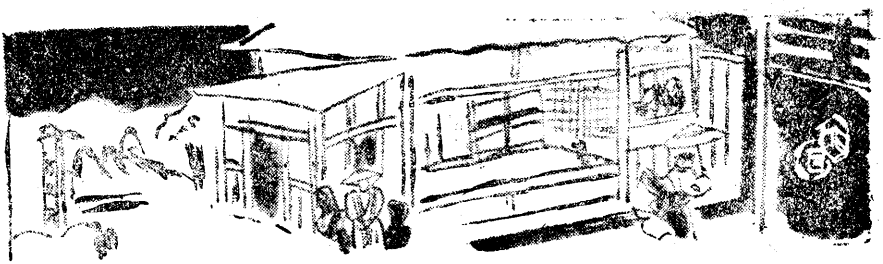
表紙・カット……齋藤清二郎

口繪一……靜岡縣人義太夫靜淨會第四回大會……

初夏雜想……紅雨莊主人（一）

文樂座新櫓下
豊竹古靭太夫に與ふ……（九）

上司小劍　河竹繁俊　中村星湖
佐藤紅綠　濱村米藏　小杉放庵
近松秋江　久保田金僊　紅雨莊主人
花柳章太郎　德富蘇峰　島東吉
本山荻舟　宇野浩二　齋藤金太郎



田中煙亭　川村花菱　安藤鶴夫
近江秀明　中野三允　岡田蝶花形
安部豊　西尾福三郎　木村錦花
伊藤紅二　阪井久良伎　小泉蛙鳴
齋藤拳三

五月の文樂座……西尾福三郎（一三）
藝道と時局……伊藤紅二（一六）
明治座の新綾之助……内田三千三（二九）
會報・消息……（三一）
太棹社彙報……（三四）
歸國吟……芳河土（三八）

眞の戰は正に今後に在り

一億の決心愈々堅し

初夏雑想

紅雨荘主人

◇堀川の「田舎がまし」は「田舎が増し」ではなくて「田舎、がまし」即ち田舎のやうなと云ふ意味であり、自然「が」で持つのは間違ひで「田舎」で持つて「がまし」と語るべきであるといふのが略ぼ定説となりつゝあるやに思はれる。私も一應はさうかとも思つたが、怎うも今一息はつきりせぬ所がある。

◇此點について古い所では攝津大掾の説がある。當時は大抵「田舎がまさる」と語つたさうで、五行本には、ハルフシの印が「が」の字の所に付いて居るので、一般には「田舎がア増しの」と語るが、丸本には「ま」の字の所についてゐるから、「田舎がまアしの」と語るべきであり、從つて其意味は「田舎の方が増しだ」といふのでなく、「田舎のやうな、田舎らしい」といふ位な意味で、極く輕く書き流したものであらう、といふのが大掾の説になつて居る。今日の「がまし説」は恐らく此邊に發してゐるのでは無いかと思はれる。

◇これは流石に其道の人らしい説の立て方で、朱を土臺に考へたわけであるが、今の「がまし説」は恐らく之を祖述したか、或は「田舎が増し」のなどは無器用な云ひ方だから「がまし」ではなくてはならぬといふ修辭上の意見であるか、どちらかであらう。何れも一應尤とは思ふが、私には「田舎がましの」に於ける「の」の字が氣にかゝるので、若し田舎の様なといふのなら措辭としては「田舎がましき」とあるべきではあるまいか。それにしても「田舎がましい」といふやうな無理な言葉を使はずともよささうに思はれる。

◇形容の句を「の」で名詞につなぐ例は、「心なの下部やな」「いとをしの有様や」など澤山ある。又「がましの」も「烏滸がましの言ひざまや」などゝ云はぬ事も無いかに思はれる。しかし「田舎がましの薄煙」の「の」はどうもこなれが悪い。

一體こんな場合の「の」は感情的に語氣を強める爲めに使ふやうに思ふのであるが、單に「田舍のやうな」といふだけの意味なら、「の」でつなぐのは不適當ではあるまいか。第一「田舍がましい」と云ふやうな言葉が實在するであらうか。「がましい」といふ言葉は「催促がましい」「晴れがましい」「淫りがましい」「烏滸がましい」といふ風に感情が加はるやうに思ふが、「田舍者のくせに、都がましい」などいふならまだしも、「田舍がましい」は非常に無理な使ひ方であるやに思はれる。

◇大掾は「田舍がまさる」と語られるのが可笑しいといふ點から朱を調べて「がまし」に到達し、吾人は「田舍が增し」といふまづい文句を厭つて「がまし」に到達した。しかし、「田舍がまし」といふ言葉が第一變な上に之を「の」で薄煙りにつなぐのが更に變だとすれば、惡文乍ら「田舍が增し」を原文として大して甲乙もないやに思はれる。版下書きの書いた丸本の朱の位置が絕對正確であるかどうか、第一丸本から寫した筈の五行本が已に屢々丸本と朱の位置を異にして居る。本題の丸本を實見はしてをらぬが、「がまし」なら寧ろ「ゐなか」の「か」の字に朱がつくべきであるまいか。此邊も考へ得られるやうである。

◇御殿の「茶飯釜」を「さはんぶ」と讀む根據がよく分らず、多年心掛けてゐるが、單に七五調を整へるだけの目的で無理な讀み方をしてあるといふ以上に分らずに居る。樋口慶千代氏は「ちやめしがま」と讀まして居られるが如何のものか。京都出身らしい東京の或葉茶屋で聞いたら、「ちやはんがま」といふのがあり、茶道に使ふ釜の一種で、實物を見ると一升焚の飯釜のやうな形に出來てをり、上に蛇の目形の鍔のやうなものがはめてあつて口徑を小さくし、其蛇の目の穴に普通の蓋が乘つて居る。單なる變り型の釜か、それともこれで飯をも本當に焚くものか、茶道の人に聞いたら直ぐ分るであらうと思ひつゝ、まだ機會が無い。それにしてもこれで政岡に飯を焚かした作者の腕に感心する。

◇沼津の「子にかなはぬ重荷を負ひ」は不通の文章である。「身」の字の草體を版下書きが「子」と見違へたのであらうといふ說は一應通るやうであるが、此頃猿之助氏から「甲」と書いた細字の稽古本を旅先で見たと聞いた。重荷を負ふ脊の甲螺で、これなら一層よく通じる。尤も院本には、假名で「こ」とあるから「子」も「身」も「甲」も何れも宛て字であらう、外に「根」說もある。沼津邊の方言で無いとも限らぬやうな氣もせぬでは無いが、一字の語の語尾を、縮めたり延したりする（子を「こう」藝を「げ」と云ふ如き）大阪の人の直感に訴へる外、一寸安心の出來る解釋に到達しさうもない。

◇吃又の「心功にして志厚けれども」は昔から此通り語つて

居るさうであり、今遠へて語る人がゐるかどうか知らぬが、どうも變に思ふので、相憎手許に院本が無いから古い活字本を見ると「心切にして」とあり、「功」は「切」の書き違へと思はれる。「唐繪の樊噲張良を楯についたと思し召しいざお暇と立出る」は「思し召せ」とあり、これも無論さうあるべきである。「高觀音」も印の通り普通發音するやうであるが、土地の人は「高觀音(たかがんのん)」と發音する。寺名は別にあり、見晴らしのよい高地にある觀音様だから俗稱にさう云ふのださうである。大津の出來事で大津人の詞とすれば、後のやうに發音すべきであらう。

◇半七の「七」はシチと語らねばならぬと云ふ説が出て、反對論も多いが、今の所贊成論が優勢のやうである。其根據は字引にさうあるといふ事と、少くとも東日本ではさう發音する事實に基くものらしい。字引には「七」も「質」も、此種のもの何れもシチとあるから、シチが正しく、ヒチは訛りだとも云へるが、日本の西半分は「七」も「質」も何れもヒチと發音して居るから、日本人の半分は片言を云つてをる勘定になる。しかも、も一つ奥へ行くと、一體字引とは何だといふ事になり、字引に書いてある事のみが日本語なら、字引が日本語よりも前に出來たか、又は日本語の全部が字引に有るわけになる。併し其何れもさうで無い事は人の知る通りである。尤もそこへ行くと昔どう發音したかと云ふ事に問題が延びるが、當面の問題のみに範圍を限つて考へれば、精々が德川時代の上方の發音迄行けばよいので、先づ今日と大體大差ないと獨斷しておかう。大阪の天滿生れのお園は大方東京の神田育ちの兄いさんと掛け合ふのであらう。お園に「半シッツァン」と云はせる事の困難は江戸ッ子に「喧くわ」と云はせる困難と比較して大差無からう。從て少くとも「詞」に於ては半ヒチでよいといふ結論になりさうである。がそれ以上理窟で固めやうとすると事が面倒になる。例へば文章の所はシチと發音すべしと云へば、文章語其儘詞に語られる所は如何、言葉體の文章の所は如何、と云ふ事になる。併し難有いもので、實際は場所々々によつて適當に、大體今云つたやうな目安で、語り分けられ、「耳につかぬ」を尺度にやつてゐるやうである。「ヒとシとの間」といふ變な答が當時も有つたが、案外これが一番及第に近いらしい。

◇序に一寸注意すべきは「七」は原來日本語でなく支那語だと云ふ事である。日本語の數詞は、いとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつゝ、むつ、なゝつ、やつ、こゝのつ、とを、であり、一二三四は南支那の言葉で云ふと、イー、ニー(北方語ではアル)、サヘ(サン)、スー、ウン(ウー)、ロ(リウ)、チ(北方語もチ)、パ、キウ(チウ)、ゼ(シー)である。どうしてそしていつ頃から、この外國語の「チ」を「シチ」と讀むやうになつたのか知らぬが、言ふ方では日本の半分は「ヒチ」と

云つて居り、片言だと云つて見た所で、單に字引と違ふといふ意味だけしか無い。寫實主義の生世話物の詞を、字引や文法で干渉するのはどんなものか。

ヒとシ計り八釜しく云つても、喧嘩、心外、奇怪などどうするか。觀音、判官のやうな云ひ易い言葉でも往々にしてカンノン、ハンガンが映りのよい場合もあらう。主意はもとより結構至極だが、それに拘泥すると宜しきを失ふ場合を生ずる。

◇誰れかに教はりたいのはンの發音である。これは唇を閉ぢるべきか、開いたまゝでよいか。太夫のうちでも織太夫などは耳につくほどムと云ひ、小仙などは酒屋の「三人が」を「サムムニム」がと云つたりするが、ンを明瞭に聞かせる技術としてなら明瞭に聞こゑる程度でよい事になる。所が大阪邊ではムと云ふのではないかと思ふ節もあるので、現に「三」の昔の發音はサムだと云つたりするから、文明の古い幾内の事だから古い發音が殘つてゐるかとも思へ、同時に、例へば「日本棉花」をゆつくり發音する場合に、ニホムと引ばつてメンカと云ふ人が大阪の人にある。或は大抵の大阪人はかう發音するのかも知れぬ。又東京ではンは語尾だが、大阪では獨立の一字ではないかとも思ふ。此邊今迄大阪の人に聞いた所ではよく分らぬ。

◇「云ふ」といふ言葉をイウと發音するのも、音曲上の扱といふよりも寧ろさう云ふ風に發音されてをる言葉であるやに思はれる。ゆつくり土地の人に發音して貰ふと分る。御殿の「大名とイウものは」地唄の黑髪の「妻ぢやとイウて」の類である。無論文法上は、いはん、いひ、いふ、ゆふ、いへでユウは崩れて居るのだと思ふが、文法論でなく上方の話し言葉としてどうかと云ふのである。此點も高教を乞ふ。

◇因に上方の「ク」は唇を尖らせて唇で發音し、關東の「ク」は唇は自然のまゝで舌の奥の方で發音する。「苦しき息を」などですぐ分る。「繪」も上方のは東東のと違ふやうに思ふ。東京のは「イエ」のエであり、大阪のは「イ、エ、」のエであるらしい。「お前の姿を、エにかゝし(但し切るのではない)」であつて「お前の姿をゑにかゝし」ではないと思はれるが怎うであらう。表現がまづくて分りにくからうが、scene との區別を頭に描いて頂きたい。こんな事はどうでもよいやうでもあり、さうでもないやうでもある。つまり、ナマリ範圍、程度といふ問題になる。

◇訛りについて色々云はれる。しかし、要するに清酒は清酒の味がした方がよく、ドブロク臭かつたり、泡盛臭かつたりしてはどもならぬ。云はゞ鼻の問題で、少々の異臭は平氣だと云ふならまた何をか云はむや。

◇紙治の「子仲迄なした仲に」は可笑しいと云つて「子迄なした仲に」と語つて褒められた人が有つた。しかし子仲なす

と云ふ言葉は、少くとも當時は話された言葉であつて、單に今の我々の耳に遠いと云ふだけである。分らぬから直すとなると分らぬだらけになり、又分らなくても一度聞けばあとは分るとも云へる。無いもせぬ金山、鹽谷殿に親御は無いもせぬものを、是れ不合理なり、とは云へぬ。

◇千本の道行の「勝り劣りも波の音」を「勝り劣らぬ波の音」と語るのは、「波」が「無い」を掛けて居る事を見ぬ爲めの誤りである。鳴戸の「書いた計りで下の名は、內儀さん」を、「お內儀さんと」語つては「內儀」を「無い」に通はせた文章が臺無しになる。志度寺の、「流石の森口あんごりと」の「口」は森口の口と口あんごりとを掛けたやうに思ふが、考へ過ぎか、それとも書き過ぎか。掛けてあるとすれば「子は親を、柱、んとすれど」式に語るにはどう云ふか、とふと考へる。「云ひつゝ內へはり箱の」などは無理な掛言葉を實に巧妙に使つたものだと思ふ。「入合の金の工面も引違ひ、我家へ歸る十郎兵衞が」に於て、「引違ひ」が金の工面の行違ひと、お弓と引違ひに歸宅したと、兩方にかゝるとすれば、「引違ひ」で切つては分りにくい、「工面も」で切るか全文續けるかせねばならぬとなり、節付け迄かへる必要を生ずる。掛け言葉をどの程度迄生かして語るか、理屈を云つては片付かぬが、實際は適當な所に納まるやうである。尤も掛け言葉だと分つた上での話で、氣がつかなくては始めから問題にならぬ。

◇假名の切り方は年々よくなるやうである。酒屋の段切の、「なほいや」は今は大抵「なほ」で切られるやうであるが、太十の「その骨柄」の「そのコツ」は大抵もとの通りのやうである、行儀といふ節の「思ひヂヤラン有りげに」(寺子屋)は續けて語る人があるが、「身をへりヂヤラン下り」(忠六)は大抵はそのまゝのやうである。沼津の「樣子有つて言ひ交せし、夫の名は、申されぬが」は樣子有つて言ひ交したやうに聞こえるが、歌舞伎座で菊之助が「樣子有つて、云ひ交せし夫の名は、申されぬが」と云ふのを聞いた。歌舞伎ではこう云ふのか、誰れかに教はつたのか、どちらか知らぬが、本行でもこの方がよささうである。新口の「金故大事の忠兵衞さん、各人にしたも妾から」も「金故」から「各人」迄の間が長いので勘違ひを生じ、「金故に大事な男」とは怪しからぬと有つて「金より」と直したりした時代もあつた。しかしあまり神經質になつてもどうかと思ふので、切れたやうに見えても息が切れてをらず、氣分が通つてをればそれでよい場合が多く、第一それで無いと節付けに困り、云ふ方でも落語のヂグムの名を一息に云はされるやうな苦悶に陷る。どの程度が適當かは妥當感の問題で、何といふ字だからといふ事は常に必ずしも尺度にはならぬ。

◇假名の切り方と云へば、此頃君が代でも少し歌ひ方がかは

つて來て、われ〳〵の子供の時には「さゞれ」で切つてうんと息を吸ひ込んで、「いしの」と張り上げた。此頃ラジオで聞くと「さゞれえいしの」と續けて云のて居る。「さゞれ石」だからといふのであらう。大分前にダン道子の歌の稽古がラジオであり、それが其後の歌の稽古の型となるほど巧妙であつたが、「窓をあけて」の「あアケエてエ」をさつと窓を開けたやうに歌へと云つて大きな口をあけさせた。其他綱造氏も指摘したやうに「お父さんお早う御座います、と太郎が申しました」式の「お話」の前半は詞で後半は地合であるといふ風に、餘程何かゞわが淨瑠璃に接近しつゝあるやに見えるのは何となく愉快である。

これらは結局よく分るやうに、と云ふ事に歸するのであらうが、それなら此頃の歌唄ひがなぜあんな日本人離れのした奇聲など出して綾分りのせぬ事を云ふのか譯が分らぬ。この事はいつかも書いたが、私の更に不思議に思ふ事は、例へば愛國行進曲を始めとして、此頃の懸賞應募歌の歌詞が、聞いて譯の分らぬ事であつて、物々しさうな、強烈に見える言葉を寄せ集め、選ぶ方では歌ふものだと云ふ事を忘れて、讀む詩のやうな氣持で選ぶと見える。私達が子供の時に「四百餘州を擧る、十萬餘騎の敵、國難玆に見る、コヲヨネなアつのオ頃」と歌つたやうに、今の子供も譯分らずに、見よ東海の空明けてエを歌つてゐる。「希望が踊る」などゝいふ奇句もあり、一節か二節であとはムニヤ〳〵に了る。之に反して歌へるやうに作つた「赤い夕日に照らされて」などは今も人が喜んで歌つて居る。歌は唄へるやうに作るのが六かしいので、新作淨瑠璃が語れるやうに作らねばならぬから六かしいのと同樣である。耳で聞いてすぐそれと分る言葉を、耳に快いやうに構成し、そこに感情が切に包まれておるといふのでなくては、文章や或形の詩ではあつても歌では無い。

◇これは日本人が「語感」を失つた結果であつて、此頃のギスターの文句や標語、新聞記事の見出し、書物の名前の或者等を見れば、それが染々感じられる。これは文體の新舊と云ふやうな上つ面の問題でないので、此方面に於ける文化の退歩である。近松の作は、其内容の優れたるは勿論として、著しい特長は語の撰擇洗鍊と、其語によつて構成さるゝ文章の感じ、トーシの無類なのにある。太平記を讀んで何とも云へぬ快感に浸り得るのもそれである。そして日本人がかく語に對して鈍感になつたのは、主として大正頃から風をなした歐文脈の文章の影響だと思ふ。外國文を原文で讀んでこそ其語感なり文章の味がぴつたり來るので、言葉の構成の違ふ日本語を歐文類似の文體で綴れば、所謂「ことのそれ」式片言になり、それになれると日本語に對する正確なる感覺を失ふ。單語のよせ集めのやうな冗長無效果な文章や歌を生ずるのは當り前である。此事は文體の變化といふ廣い問題と交渉する

が、それにしてもこゝに書いただけの事は間違無からうと思ふ。

◇同じ事が「音感」について云へる。音感教育といふ事が何を意味するにしても、明治以來の西洋音樂が、日本人の音感を鈍くした事は間違ないと思はれる。西洋音樂は進歩したもの、日本音曲は幼稚なものといふ考へは、油畫は高級藝術で南畫は兒戯だといふやうなものである。一國の言葉にはそれ〴〵の發音なりアクセントがあり、それは恐らく其國々の風土、從つてそれから生ずる傳說によると思はれる。日本語と西洋語との發聲の違ふ事はいつかも述べたが、音階も同一でない。洋樂器で日本歌を奏し、和樂器で西洋の音樂を奏して共にピッタリせぬのは、音色の相違の問題ではなくて、音階が違ふからである。西洋や支那の音階は一本の弦を二つに分け、三つに分けといふ風にして出來たもので、それにしても各の音の振動數は正確には迄比例をしておらず、樂器では便宜上平均振動數で音階を極めて居る筈である。かくして極めた音階が唯一無二のものであり、且つ正確にして最も美しいものであるとは、法律でどもさう規定せぬ限り云へぬ事である。日本語には日本語の調子があり、その最も宜しきに適ふ所を耳で極める。調子笛もあるが根本は耳である。醬油が何デシリットル、砂糖が何グラム、味の素何センチグラムと算定しても、食ふものは結局舌だといふと同じである。耳で聞く音階を耳で快適な所に極めるのにどこに無理があらう。和音を「製造」するには西洋音階が如何にも便利であらうが、當面音感の問題について云へば、日本語の歌詞を小學校時代から西洋の音階、音譜で習つた報いが無い筈は無いと思ふ。かるが故に、作曲の如きも西洋式強弱アクセントを基礎とするボン〳〵蒸汽式の足取(例へば、見よ東海のオ空あけてエ、と云ふやうなメリハリは日本語離れがして居ると思ふので、これは行進曲で歩調に合ふ爲めとも云へやうが、西洋樂譜の構成が原來小節で區切つてメリハリが機械的に繰返されるやうに出來て居る。之に對し日本では序破急といふやうな三段のメリハリや、拍子にノル時の西洋流の機械的なメリハリもあるにはあるが、原來が自由で、同じ事の繰返しを嫌ふ。西洋でも色々の符號や略字を以て延したり縮めたりするやうだが、原則とする所が同じでないやうに思ふ)それに無理に當てはめた日本語、(例へばヒップ、ヒップ、フレーに合ひさうな作曲を日本語の「吾等」にあてはめて、「わッれッらア」などゝ云ふ不埒な云ひ方)おまけにそれを西洋流にへち曲げて、西洋流の作り聲で唄はれても、嘔吐を催さゞるのみか、それが一層高級なもので、日本在來の歌ひ方などは俗曲里謡の類を出でぬと思つたりする。今更音感教育の要る所以である。吾々明治生れの人間は明治時代の軍歌などを今頃の歌ひ方でラジオなどでやられると、舌長いオランダ人の片言でも

聞いてゐるやうで胸が悪い。昔の人は三味線の調子を聞いて彈手が誰れかを云ひ當てた。今は少々合つてゐなくても平氣で聞いて居る計りでなく、三味線彈自身に調子の合つて居らぬのが有つたり、所謂聲樂家に至つては、折々飛んでもない調子外れのある事、往々ラジオで聞く如くである。私の豫言を許せば、西洋崇拜最後の殘滓たる西洋風の作り聲が先づ揚棄せられ、それから西洋風の作曲を日本語に對してする事が考へ直され、ついで日本在來の音曲が、日本語といふものと關聯して更めて見直される時期が來る。その日本在來の音曲には、他の凡ての文化と同樣、幾多外國音樂の影響のあるのは無論として、それは已に年を重ねて熟し切つて居り、日本在來と云ふを妨げぬ。其曉には淨曲がワグナー、ベートーベン、ショバン、モツアルト、何々スキーと對比せられ、作曲者の名の分らぬのが學者苦勞の種とならう。其時には天才宮城道雄の和洋コクテール式音樂が、過渡期の產物として特筆大書される譯になる。和樂の大殿堂として七堂伽藍に輪奐の美を恃るわれらの淨曲、それ自愛せよ、である。尤も七堂伽藍は紙の上の圖面でなく、實物が嚴存する事が必要であり、破れたるは修理し、缺失したるは再調して、歷史や評論の上の存在でなく、現實の存在である事を必要とする。

（一七、六、一二）

社告

東京第一陸軍病院　太棹第百卅六號
東京第三陸軍病院　同　三　十　卅

寄贈者　齋藤山生氏

右弊社の趣旨に贊同せられ、傷痍將士慰安として御寄贈下被候段奉謝候、第一陸軍病院には五十名、第三陸軍病院には三十名の愛好家有之、毎月の「太棹」を樂しみに待ち居られ候、何卒皆樣より御寄贈御申込み賜り候はゞ幸甚の至りに奉存候

太棹社

文樂座新櫓下

豊竹古靭太夫に與ふ

—諸家—

□上司小劍

人には地位を與へると、自重し、努力して、或る程度の進境を見せるものです。古靭太夫にいまさら進境もをかしいが、坐り場所がよくなると、行儀も正しくなり、風格を新らしくする。

文樂の紋下といふ地位が、因襲的にどれだけの價値を保つものか知りませんが、相撲で言へば横綱、自重の上にも自重を加へることゝ思ひます。その結果、却つて消極的になつては困りますが、從來東京での出しものは、殆ど版こで捺したやうな幾種かに限られてしまつたのも或は自重のためか。これは古靭に限つたことでなく、久しく聽かない『日向島』や『伏見の里』等々、いろ〳〵出してもらひたい。

□河竹繁俊

古靭太夫師が櫓下の位置になほられてから初の東上とあつて、各方面の方々の期待も一新され、意義あることと信じ、慶賀に堪へません。

こんどの櫓下ほど、近來順當に感じた藝界の出來事はありませんでした。態度の上に、また藝術の上に、特に從來と急に變化のあらうわけもありませぬが、相變らずの精進努力を切望するものであります。と同時に、御健康に留意されまして、藝道に於ける指導に、また斯道研究のために、盡されんことを衷心から祈ります。

□中村星湖

古靭太夫の人を知らず藝を知らず、從つてその太夫に

對して何を要求するといふハッキリした希望を私は持つてゐません。第一、現在の淨瑠璃界の事情にも人物にも通じてゐないのだから、何とも言つてみようがありません。

たゞ、人形の振りに連れて歌ひ且つ語るところの義太夫といふ物が、主として耳に訴へる藝術であるところに非常な興味を持ち、日本音樂の粋こゝにありと言ひたいのです。

明治四十二年の頃、英國の有名な劇評家ウヰリアム・アーチヤーが來朝して、日本の淨瑠璃を聞いて「あの牡牛の唸るやうな高聲の何處がいゝかわからない」と嘆じたのを新聞か雜誌かで見て、國情、人情が違へばさうしたものかと驚いたことを記憶します。其後西洋の歌劇をも幾つか見聞しましたが、「牡牛の唸り」はむしろあちらの歌劇にこそ當てはまる評語だと思ひました。

日本の聲樂は大體、單調だと言はれ、弱々しいと言はれますけれど、それは聞く者の耳の穴があいてゐないためだと思ひます。文樂の淨瑠璃などは、それよりも古典的な能樂と共に十分保存の價値あるもの、是非共保存の策を講じなくてはならぬものと思ひます。

□ 佐藤紅緑

文樂の淨瑠璃に就ては久しい以前より識者が相應に頭を惱まして居る事と思ふが、左りとて將來の發展に就てこれといふ名案もない樣だ、文樂はどうなるんですかとは私も今まで何十度となく質問を受けて居るが、私は其れに對して明かに答へる事が事來ない。

只た私はウキクトル・ユーゴーの言つた害葉を以て答へるより他はない、ユーゴーは恁う言つた。

「最も善き藝術は進歩もなければ退歩もない、最初から絶頂の位に居るものだ」

人形淨瑠璃は其れであるまいか、近松時代が最高であつたとすれば、其れが今日まで最高を續けて居たので、日本の純藝術として大なる意義を有して居るのだ、其の價値は上がりもしなければ下がりもしない、其れが他の藝術よりも偉大であり、底力があり、根柢が深い所以である。だから古靱太夫に期待する處も別に新しき希望は私にない、新らし味を副へるといふ事は古きものゝ一部を破壞變更する事だ、私は何んにも破壞して貰ひたくない、變更もして貰ひたくない。

最初から絶頂にあつたものを、どう動かしても、其れ以上に押上げられるものでない。

誤解のない樣に賴みたいのは、私は何も今までの語り物で滿足せよといふ意味ではない、新作物がどし〳〵現はれることを望む、だが新作物でも昔からの淨瑠璃の約

束だけは必らず從順に守るべき事だ。

□ 濱村米藏

古典の王城文樂守護の爲に、古靱太夫が名實共に立派な檜下であることを祈ります。

藝の方面に就ては、今更らしく、改つた註文はありません。それよりも、舞臺裏にあつて、充分檜下たる權威を揮はれ、一座の統制と規律を嚴肅にされたい。さうして後進の指導と養成とに、萬々遺漏のないやう、幕內外の衆望を、身一つに蒐められることを望む。要するに傳統藝術の理想的師表の體現でありたい。尙、丈の出物の點で、蛇足を附け加へれば、前受けはしないでも、いいものは敢然取換へ引換へ、古典の復活まで進み、なるべく豊富にして頂きたい。それが後進にお手本を示すことであり、本當の愛好者を增す所以でもあると思ふ。

□ 島東吉

新橋演舞場での昨年の話、私が古靱太夫の「紙治」の前の時間に食堂へ行くと、私に向つて隣卓の見知らぬ男がいきなり、古靱太夫の藝を褒め出した。それがいかにも强引な口吻なので、私は美しく描いてゐた幻想を破られたやうな殘念さと不快さとで、もう「紙治」を聽く氣がしなくなつた。よき贔屓はいるが、妙に押しかけ大向ふはむしろ太夫の名を恥めるものではないだらうか。これは何も潔癖から云ふではない。

□ 小杉放庵

御問合せのこと遂拜見し居らざる爲め御申付の如くならず、恐縮です。

□ 近松秋江

古靱太夫の語り口はしつかりしてゐるとは思ひますが何と申しても素人受けのする艶が乏しいことが殘念ですが、これは今更致し方ありません。

私は何よりも文樂人形淨瑠璃を愛好するのです。然るに今日ラヂオの放送でもその他如何なる音樂でも、洋樂でなければ夜も日も明けないと言ふ世間の流行になつてゐることに非常な失望と悲觀を禁じ得ません。

勿論、場合と音樂放送する會の性質に依つては洋樂でなければ都合の悪い時もあるでせうが、あまり洋樂にかぶれても、我が國古來の傳統たる義太夫音樂を粗末にすることは悲しむべきことです。音樂としての音調から申しても、とても上品なところがあることに注意して貰いたいものです。

更にその文學的道德的意味に至つては、實にこれ程我が國固有の道德思想を具現したものはないと思ひます。どの一つの語り物を例にとつてみても忠臣孝悌の道に叶はないものはないのです。もし此の義太夫音樂が衰亡する時が來たとしたら取りもなほさず我が日本國が衰亡する時です。

□

久保田金僊

御尋ねに預り候文樂新櫓下豊竹古靱太夫に對する希望の件は、小生只今何の希望とても之無候、最も古靱太夫については小生充分に檢討仕りをらず候、同氏の語りものを聽くこと比較的少なく候まゝ、さしあたつての希望は全く抱きをらず候、併し來月新橋演藝場へ出演致さるるならば大いに謹聽して同氏の至藝をウント味ひたく存じ居り候、併しこれだけのことは云へると思ひます。即ち前櫓下津太夫師の枯淡なるものよりは大いに何等かの瀟洒さを覺ゆるやうに存じられ申候

□

紅雨莊主人

所謂功成り名遂げた古靱太夫として今後爲すべき事は次代文樂の育成であると思ふ。研究に切りは無いとし、人生には限りあり、自己藝術の完成もさる事乍ら、次代を作るといふ事が一層強く櫓下といふ地位に對して要求される。正直に云つて、今の文樂は櫓下の藝一つで客の來る時世ではない。所謂色取々、多士濟々で、一つの興行としてたつぷりお値打の有る代物である事が、高級古典藝術であると共に大衆藝術である淨瑠璃、木戸錢を取つて觀せ、お給金をそれから拂つて賄ふ、所謂興行である文樂の存立繁榮の爲め必要である。淨瑠璃を天の一角に祭り上げ、足の地から離れた無責任な議論は議論とし事實は常にこの卑俗な現實を離れる譯に行かぬ。

文樂は櫓下の自由にはならぬ。併し其地位貫祿によつては、身慾に超然たり得る人ならば、藝の上で隨分松竹に對して押しも利く筈であり、之を爲し得るもの、古靱太夫の外に無い。

文樂焦眉の問題は、人形よりも何よりも、太夫の缺乏と云ふ事である。そこには新時代に對する修養もなければ、藝に對するひた向きな精進もなき中根の藝人の一群が有つて、稽古研究よりも切符賣りと藝の切り賣りに疲れて居る。彼等は文樂のすえた臭ひになれ、大きな名を繼いで端場でも語らせて貰ふ外には當面の希望も無く見える。そして鬢に霜を置く時分に其機會が來ても藝は未熟半熟で忽ち泡の如く消える。若し若手の中から苟も見所ある者は之を叩き鍛え、時に破格の拔擢をすること、

つい明治期迄三味線などにザラに見たやうであらば、そこに希望勵みもついて、貧乏し乍ら稽古に熱中する者も出やう。「出世の希望」が勉強のホルモンである事、どの道も變りはない。此事は、古靱太夫自ら語るよりも寧ろ、若い者に語り場を與へるといふ結果ともなる。事實「すしや」一段丸ごかしなどは、結構にして長過ぎる。

かくて櫓下古靱太夫は一座のお師匠はんになるので、當然自附の任務乍ら、誰でもそれが出來るのでなく、同師にして久しぶりにそれが出來る。お師匠はんとして誰れか古靱太夫の適任なるを爭はんや。三味線の元老達が之に唱和して協力補佐する事も無論必要である。吾人は櫓下古靱太夫の淨瑠璃を聞く事を好む事勿論であるが、それに劣らぬ熱意を以て、同師によつて育成さるゝ次代文樂の盛觀を見たい。そしてこれは同師にして始めて爲し得る事である。

□ 德富蘇峰

御申越の件折角に候へども臥病中の爲、乍遺憾御希望に相副兼ね候間何卒御諒察被下度不悪御勘辨の程願上候

□ 花柳章太郎

新櫓下としての初の上京をお祝ひします。

近ごろ文樂に對する憧憬のいちじるしく、大阪へ行くのもその都度の興行をたのしんで居ります程です。私はいつも古靱さんを聽いて間違ひのない淨瑠璃と信じ安心してその演目の觀賞を娯しみます。そして勉強します。

先日の俊寛、今度の鷄娘など愛門弟織太夫に語らせますが、そうした古曲ものは我々勉強の意味で古靱太夫のを聽きたく思つて居ります。織太夫に信用がない譯ではありませんが滋味の問題です。織太夫の語り口はあまりに師匠臭しです。師匠を離れそして師匠の蕊をつかむことを織太夫に望みたいと思ひます。

自他共に許す一人者である新櫓下の古靱太夫にのぞみたいことは古典復活を時々やつて貰ひたく存じます。そして後進有望者をつくることです。三味線に比して太夫のまことにすくなくなつてゆく今日の文樂はさびしい氣がしてなりません。

□ 本山荻舟

古靱太夫に對する希望といつたところで、出來ない相談なんか持ちかけても仕樣がない。東京に於ける紋下披露、それを目出度いといふのも、お座なりの儀禮にしか過ぎないことにならう。何となれば古靱の藝術は、紋下になつたとならないとによつて、價値の高下のある筈で

ないばかりでなく、これが實現を騒いだのは、當人よりも寧ろ、いはゆるファンであつたらうと思はれるかである。それほど古靱は地位なんかよりも、藝術的良心のある太夫だとわれ等は信じてゐる。そこで出來さうな相談といへば、興行政策にのみ引ずられることを超越して、眞の義太夫愛好者の爲にあの目まぐるしい狂言替りを、この際何とか整理するか統制するかして、演技者にも觀聽者にも、もつと眞面目に熱をもたせてもらへないかといふことである。

一、つとめて通し狂言式に立てること

二、なるべく同一狂言で打つゞけ、やむを得ずとも二の替り程度に止むること

なほ新作對策に就いては、私見は後の機會にゆづるが當事者としては少くとも間に合せでなく、たとへば古靱自身に乘り出して語るほどのものを提供されたし。

□　宇野浩二

古靱太夫は、本でいふと、私の最も愛讀する本であるから、私は殊に、古靱太夫のレコードを數多く持つてゐる。十數年前など、先代の清六のを、ばらになつてゐたのを買ひ集めたことまである。

さて、わたくし事は別として、古靱太夫は、津太夫などが知らない、古靱太夫でなければ、といふやうな語り物を、上京した時、出してほしい。

ついでながら、吉田榮三、吉田文五郎などの方々も、どうぞ出來るだけ、無理をしないで、長生きしてもらひたい。それに、人形は、いふまでもなく、レコードなどにとれないのであるから、活動寫眞にどしどし取つてもらひたい。その道の人にお願ひする、

きあと、掛け替へない人であるから、出來るだけ、養生をして、無理をしないで、長生きしてもらひたい。それで、語り物なども、せめて、東京に來た時は、もつとも得意なものをやつてもらひたい。

私は、かつて、市場に出てゐない、古靱太夫の『二月堂』を、レコードで聞いたことがあるが、かういふ物は津太夫でも、古靱太夫に、及ばないのではないか、と思つた。

□　齋藤金太郎

興行觀念を離るゝ事の出來ない立場にある文樂に在つて、新櫓下古靱太夫に、いろ〳〵希望するも中々難しい事でありますが、現時局下に於ける一般民衆に求むる娯樂に刻一刻と變調を來しつゝある今日、何か求めんとして近頃非常に人形淨瑠璃に接觸せんとする傾向は益々多

くなつて來た事は、爭はれない事實であります。

依つて今日程淨瑠璃界に於ける大切な時は無いと思ふのであります。謂はゞ千古に及ぼす重大岐路に立つてゐる時なのであります。

故に當事者は其の責重にして且又愼重を要する事深大であらねばなりません。

此の時に於て古靱師に絕大の信賴を持つ私は其の技量に御任せして大なる成果を擧げらるゝ事期待して止まないのであります。

口　田中煙亭

七月又た厄介なものが東上し來る由、蔓題替り何回かの中、一度位は稅金を納める爲めに行つて見ずばと存し組見などなさる方々も內々厄介なものと思ひながら、とお察し申居候。老生病後經神衰弱の氣味にて、義太夫などもあまり聽き度く無く相成り、此のところ暫らく隱退?の豫定に御座候爲め、貴問に對する御返事も要領を得ざる儀にて申譯無之候

古靱師に對する希望など一つも無之、又た文樂に對して感想の如きも持合はせ無之、唯だ諸先生方が、目くじら立てゝ兎や角御論議有之も、言はれた御當人に、グサと突刺さるやうなものもなく、フヽンと言はるゝが落ちのやうにのみ感ぜられ、又、從來、唯だの一ケ條でも、御取り上げになつた事有りしや否や、若し有つたら手を擧けて……と申し度い位のものに有之、今回も定めし、糞眞面目に、いろ〳〵の注文もこれあるべきが、笑へもしない事だらけならんと存ぜられ、老ぼれた拙者などの出る幕でないと存じ、これにて御免を蒙りたく、齒に衣きせぬ「ぼんと」の事を言つて暴言多罪。

口　川村花菱

私は子供の頃から母には連れられて義太夫の席に行つたので、若い頃から義太夫が大好きでした。芝居に關係するやうになつたのもその影響だと思つて居ます。殊に文樂に對して非常な尊敬を拂つて機會さへあれば文樂を聞く事にして居ます。

太夫の中でも古靱さんは昔から大好きで、誰れが何と云つても古靱太夫以外に聞き度いと思ふ太夫はありませんでした。

私の家には古靱太夫のレコード以外には一枚もありません。それを時々家中で聞くのを樂しみにして居ます。そのレコードを聞く時は家の中の燈火を消して、まつくらの中でやるので、十七になる女の子があんどんを持つて來る事になつて居ます。私が好きな爲ばかりでなく、

古靱太夫は家中のものが好きです。十五になる末つ子の中學生もキチンと坐つて聞いて居ます。そんな風で、私共一家の者が古靱太夫に對する希望と言へば、いつまでも〳〵御健康で居て下さいと申上げる以外何物もありません。

□ 安藤鶴夫

豊竹古靱太夫に就て——

事新しく古靱太夫個人に對し、櫓下の重責に就て希望するところはありません。奇妙ないひ方ですが寧ろ少しぐらゐ精進を怠つても、健康を保持して永く櫓下としての責任を持つて貰ひたいものであります。

幸ひに本年一月以來休座はないやうですが、健康保持といふ意味は、勿論古靱太夫が休座せぬといふ事であります。

古靱太夫が櫓下を襲つた事の意義は、文樂座の上演目錄に、從來の月並極まるミドリの藝題を、人形淨瑠璃本來の形に戻す事にあつて、同時にこれが文樂座の人々の精進ともなる事にあります。古靱太夫の斯道に對する見識をいまこそ生かして、正しい上演目錄の復活を希望します。

文樂座の人々に——

斯道の故先輩に對する禮は勿論先輩に對する尊敬の精神を失つては傳統藝術は存在しません。それはまた藝に對する尊敬の精神でもあります。

□ 近江秀明

文樂座東上に際し御芳書頂戴恐縮に存候、別段新櫓下の希望も無之候へ共、文樂座に對し例年東上期の盛夏と年末には一考を切望致しおるものに御座候

□ 中野三允

以前は文樂ときくとそれ丈けで一個の衝動を感じたものだが、此頃は何とも思はなくなつたので、從て古靱が來たからとて何の希望も註文もない、強て一言せよとあれば皆一生懸命にやれといふ丈けだ。

文樂に對していふ譯でないが、「碁太平記白石噺」の白石を皆シライシと呼んでるが耳障りでいかぬ、之れはシロイシでなければならぬ、碁の白石黒石からも、また宮城野信夫の人名を地名からとつた類から考へても、片倉小十郎以來の城下で現在東北本線の停車場のある白石はシロイシでないか。

古靱あたりが此點に氣づいてシロイシと口上に語らせ

るなら私は話せると感心するが、若し然らずシライシでもシロイシでもソンなことは何でも構はないといふならば私は古靱をコウツボといはずにフルウツボと呼ばう。

□ 岡田蝶花形

後世範を示す名人。（呈古靱太夫七首）

いと深く、曲を理解し正しくも後世範を示す名人。

それぞれの時代それぞれ名人の出るもうれしや君も然るか。

美音美聲一代藝の風格をつくる名人今の世になし。

今の世に名人たらん事よりも後世に名を殘すに如かず。

前世の大椽、大隅、今の世も人惜しむなり南部、津いまだ。

美音美聲この二代目は又出んも君の頭腦をつぐ人のなき。

浮曲の道に二はなし正しくし演ぜば後世人賞めなんか。

□ 安部豊

まづ健康第一義を望みます。同氏は從來上京出演の節は大抵病魔に冒されて充分に語り得なかつたやうに思はれます。家庭的に惠まれなかつたけれども、多年宿望の檜下をかち得たのですから、すべてを一新して若く朗かに堂々とやつて貰ひたい。文樂陣營寂寥の昨今です。特に自重發奮を囑望いたします。

部隊長といふ立て前で部下を督勵し、若手連がモットうまく語るように骨折つて貰ひたい。自己の弟子以外の者共に對しても存分に注意誘導を與へ、自まゝな妙な浮るりを語らぬように嚴然と振舞ふことです。菊五郎が自他の門下區別なしに嚴しく指導しつゝあるあのイキで猛進して欲しいのです。

□ 西尾福三郎

檜下と云ふものは、どの程度の權力乃至重壓を保有してゐるものか知りませんが、昔と今とでは大した差があるのと違ひますか。今日では單なる名目のそれに留まつて、松竹と云ふ興行會社に專屬する以上、營業面に於ける一スターとしてより以上の壓力を文樂の今後に期待するのは無理でせう。私としてはこの人を檜下にせずに津太夫時代のやうにこの人はこの人として超然たる獨自の世界に立籠つて純藝術的な研鑽三昧の境地に安住してゐてほしかつたのです。師自身も恐らく檜下と云ふ地位に坐る事をそれ程心から欲して居たらうとは考へられません。以上の理由によつて今更ら希望を申し述べる迄もない。

なく毎月の誌上に私自身の感ずる所は隨時隨所に申し述べてきました。そこで貴誌の發行日の都合で本月の文樂座便りに代へて餘白のあるだけをその記事に充てゝ一と先づ上半期の結びと致します。

千本櫻を道行から河連館まで出したのは結構でしたが南部伊達の靜に七五の忠信で段切りの古靱の持場に到る迄に春と重の二人が口と中を語つてゐて、これが頗るの難物、爲に肝腎の切の冴えない事夥しく、この新古靱師割を喰つて損をしてゐて、同時にきく方も迷惑至極で、文五郎の靜が獨り眼に殘つてゐます。

千軒長者の新脚色は思ひつきで、織の鶏娘の條りだけきゝましたが例によつて音遣ひも細心に團六の絃も冴へてゐました。それより本月きつての收獲は切狂言の朝顔大井川を新左衛門がひいてゐる事で、あの豪壯な送り三重から以下絃に相應の妙境は紋十郎も伊達もなく、實に至玄の妙音であつた事を強く感じました。久しぶりで老いてます〳〵健在なるこの人の存在を力強く目出度く思つた事でした。以上取急ぎ回答に代へて筆を擱く事と致します。

㊀ 木村錦花

見るから不自然なあの人形が、名人の使ひてと、床のよき淨瑠璃とに魂を吹込まれた時、あれほど立派な藝術を構成するものかといつも感心させられる。

古靱太夫の淨瑠璃に就いては、其の耳を持たぬ者がかれこれ言ふも如何であるが、一寸弱々しい聲のうちに溢れるほどの美しさと艶があり、端然として上品な語り口にも好感が持てるが、たゞ一つ、言葉になるとはずみが附き過ぎ、地も、えぐりすぎる處があるやうだ、お芝居になつてしまつては、面白さばかりで、クレンになり易く、感情を表現するにしても、少し行き過ぎのやうである。

㊁ 伊藤紅二

一、語り口に誠實なる點は甚だよろしきも藝術として見たる場合には、普遍性と妥當性と而して、感情の上の共感とをかち得る樣な工夫と努力なほ必要の樣に思はれて、今の紋下にはそれを望むや切。

一、「陣屋」とか「寺子屋」とか「良辨杉」とか、極くかたよつたものばかり選ぶことの偏見を是正されたい樣にも思ふ。然し之は稍々主觀に過ぎるか？

一、「おしつけて語る」と云ふともすれば紋下の致命的な缺點を自覺されるの餘り、之を氣にし過ぎての警戒的態度は今の場合惜しい氣がする。

一、間のびになり易い語り口に一苦勞すれば完璧と云ひ度い現在をたつとぶ。

一、惡口を云ふ人に「お辨當のすがし」なんどかつて聞いたことあり、之をあの押出しの立派さを完成に近い藝境にてグットおさへるあたり近頃快心。

一、いろは送りあたりのさわりに絶妙のものあり、清六とのコンビを完成せしめられんこと切望にたへず。

□ 阪井久良伎

私は全く義太太夫門外漢で、お尋にお答へする資格のない事を恥ぢ入ります。明治二十二年頃でしたが播津大掾の前身越路太夫上京大評判で、亡き父や伯母と一所に京橋の寄席で同人の寺小屋を聞いて「いろは盡く子は」の件で、越路が無上に伸上つて語つたのが印象に殘り、伯母がケレンだと評した事を思出します。又大隅太夫と團平を一度牛込藁店で聽き團平の三絃の冴えが微に耳に殘つてゐます。當時東京では神田小川町の五十稻荷附近の新聲館かに播磨太夫と云ふ艶物語りが出演して人形芝居を能く見たものでした。

が義太夫は舊劇の重要藝術ですが、江戸子は河東節や一中節、長唄、清元を好んで、義太夫の語り物を好まない性癖が有りますので、私は義太夫通には成れませんが昨今文樂の復活を日本精神の現はれの一つと非常に喜んでゐる一人です、お答が甚だ淺薄で申譯がありません。古川柳に「吾作に感涙流す門左衞門」「引導のやうに義太夫序開きし」杯があります。

□ 小泉蛙鳴

「新櫓下豊竹古靱太夫に對する希望」健康のみです。健康でさえあればなるべくしてなつた我等の櫓下、聰明なる古靱太夫の指導方針に何一つの不安はない。

協會の結成、若手勉强會の擧行に於て實績既に觀る可きものあり。

次に何が現はれるか首にかける人形箱を愉しみに待つのみである。

人間の精神力の威大さ！

披露興行の「熊谷陣屋」が何日續くかとの不安を美事一掃、本日迄一日の缺勤も無いといふ素晴らしい古靱太夫の健康ニュース。而も引越しやら唯一人の娘さんの病氣等精神的にも身體的にも過勞の裡に本興行の好成績、加ふるに協會及び勉强會の統率振り唯々天晴なる櫓下の手腕に驚嘆するのみ。

新櫓下古靱太夫の精神が持病を吹つ飛ばす奇績の到來を祈るのみです。

社からの申越は新橋下への希望とある、自然古靱太夫箇人へと、文樂座檜下としての古靱太夫へと、二つに分れる。

古靱太夫の場合　今の文樂は古靱太夫以外味ふ太夫が無くなつてしまつた。從て此の人に對する希望はすこぶる多い。

法善寺と云はれた先代津太夫門下にあつた若い津ばめ太夫は早くから獨創を持つた上品な語り口が、其の洋々たる前途を當時の義太夫好きに約束させた事は、衆知の事實であつた。然し今とは違つて其の當時の若い太夫、多士濟々の內にあつて、あの比格的小音非力な此の人が氣魄一つで三段目、四段目の大物をかたつぱしから語りこなす大太夫にならうとは思はなかつた人も相當に多かつた。

然るに若き古靱太夫の先天的なよき素質と純眞なたゆまざる努力は、此人をあの絕妙な音使ひの名手に完成させて、器こそ小さいが、立派な紋下にしてしまつたのである。

實際先代清六と組んでる時代の青年活氣の古靱太夫は當時の古靱黨の云つた通り氣魄一つで神事に近い淨瑠璃を語つたものである。

彼のよき手本となつた先輩が怪傑三代目大隅太夫であつただけに名人團平のドギ〳〵した鋭い氣魄は、或る程度意外にも三代大隅を通じて古靱太夫と、三代清六に傳つたとも云ひ得るであらう。

師匠の津太夫の影響を餘りにも受けて居ない、むしろ大隅の影響を受けてる古靱太夫と、大隅の直門にありながら攝津大椽の藝風のみ崇拜して居た故土佐太夫とは二人が同期に生れた太夫だけに私には興味深いものが對照されるのである。

然し晩年の古靱太夫は兎角健康を損じ勝ちで、打續く家庭的の不幸や一部の好事家によつて扱かはれた不快な紋下問題等の爲か？　神事淨瑠璃だけは影を消したと云つても過言でない。

私の尊敬する平井眞次郎、是澤九似、平山平茶等諸の先輩の說く古靱論は、一應吾々後輩が再檢討する價値十分なのである。

が然し、私は是澤氏の如く何でも義太夫節を昔の時代にしのぼうとする懷古趣味者では決してないのである。古靱師自身、晩年の體力、聲量、解釋等を計算に入れた甘い演出法を創造して望しい、其處で希望としては、

(一)語り物を自身選ぶ事

師が孤軍奮闘する時代も永くてあと十年であらう。津太夫と違つてる人である、語り物を定める場合、決して仕打側から拝みたをされてはいけない、端場が附かないと氣分の出ない淨瑠璃だと思つたら、頑固に端場を附けさせるのもよい、亦偶には研究家を喜ばす様な、素義には向かない語り物もよからう。津太夫の様に「沼津」と「吃又」ばかり繰返して死んでしまうのはつまらない、伊勢物語り、矢口渡、渡海屋、道明寺、俊寛、語り物は豊富である。

(二)東京の興行の語り物は全然別の立場から考へる事東京出開帖の興行は盛夏の悪期節に大きな劇場で五日變りを演る悪條件である。若い時から餘り聲の丈夫でない人だ、此の頃は特に調子を痛め勝ちである。小音、非力の目立つ語り物は、いかに研究濟の十八番物でも、大阪四ツ橋の本城以外は演らぬ事としたい。其の意味で熊谷陣屋、千本櫻すしや、など嚴封ものである。別に陣屋やすしやが悪いと云ふのではないが、大きな東京の小屋では聽く方が樂でないと云ふのである。

(三)大正末期の語り口に歸れ

古靱太夫は早熟にして完成した太夫である。試みに彼が三十歳臺に語つたレコードをかけて見るがいゝ、今の若手に比して其の差の餘りにも大きい事が一日して氷解するであらう。一つ一つ部分的に細かく解剖すれば、次第に益々老熟した箇所も多いが、亦同時に青年古靱の善さを忍び復活させたい箇所も非常に多いと思ふ。

現在の如く斯界には彼の稽古臺になる人の無い今日、二十年前の古靱太夫自身に、自分が習ふ事も一番手近で有意義な事ではなからうか、勉强家の彼は毎日、合三味線の清六と引合せをしてゐる、其の席で彼は弟子に向て「お前たちも私の淨瑠璃に新しいテツでも出來たら知らせてくれ」と、誠に味ふべき頭の下る言葉を、筆者は彼自身の口から耳にした事がある。藝人は一生此の心がけがないと、段々藝にくさみが出て來がちなものである。

檜下に對する希望　私は人形淨瑠璃に絶望して居る一人である。古靱太夫にしても十五年前津太夫と紋下を爭つた時代だつたら、借金しても自身を犧牲にして文樂の改組を斷行する勇氣と情熱があつたであらう。が今では何としても十五年の歳月がすぎた、時の流れは實に大きい。人氣太夫はチヨボとかけ持ちになり、人形遣いは他流の清元で振り附けをする時代である。文樂の根本的改革を此の人に望むには、古靱自身と文樂との間に距離があり過ると思ふ。然し無理に拾つて見るなら、

(一)吾が海軍の軍人精神を、文樂座員一同が學ぶ事。

卽ち平出大佐は云ふ、吾が海軍は米英に對して兵器は

同等でも其の戰鬪精神力に雲泥の差がある、海軍少年航空兵は最初の一年間　陛下の御爲、笑つて死に附く訓練をやる、其れが二年目になると敵をたおすまで決して死なぬと云ふ心境にまで皆到達すると、昔の文樂の連中の稽古は將にこれであつた。今の文樂には三業中此の本格的な修業を經て來た人は數人しかない、此れを若手の人に心を鬼にやらせたい。

尙、駄足を加へれば、兵器とは人氣と給金に當り戰鬪精神とは猛稽古に當る、客に一人も手をたゝかれなくとも何等の寂しさも不安もなく、大膽に日常の猛稽古を本興行の舞臺に持つてくる訓練をするのである。其の無我の過程を經て始めて客の胸倉をつかまなければ已まぬ境地が生れて來るのである。

一の場合を經ずして、二の場合のみを望む藝は、決して此の多忙な重大時局に寸暇をさいて觀賞して置かなければ、悔を後世に殘す級の藝ではないのである。

個人教授の實行　一二の人の云ふ大序の連中の稽古を本興行の開場前に二三時間やれとの意見は一應はもつともであるが、今の藝人スピリットでは演つて功果があるまい、少くも若手から幹部に懇請して幹部總出で監視しなくては駄目だ、切符賣りをする時間をさいて此れを實行する勇氣があるだろうか？

其れよりは古靱太夫に、榮三は光之助にと云つた具合に各自望みのある愛弟子に自分の藝を後世に殘すつもりで箇人教授の猛訓練をする方が近道で功果的であらう。弟子は師匠の長所よりも短所のみ傳はりたがるものである、愛好家亦よく此れを嚴重に監査すべきである。

人間古靱太夫に對して若い時はいざ知らず、現在の古靱には全く敬服である。

あく事を知らぬ藝術研究慾、斯道を愛する爲め痛々しき讓歩と親切、全く滿足である。只藝道は總明な人程、人に教へたがらないものだ。然し文獻も記錄も秩序もなかつた我が藝道は、秘傳秘話として愚者の叱正によつて今に傳つた事を思はねばなるまい、藝道の功勞者は賢者よりもむしろ愚者にあるのである。

(三)人形との問題

今の文樂の人形芝居は淨瑠璃の文句を知らぬ人が見た場合、將に三位一體である。然し事實は此れに反してゐる。寺小屋の源藏が「只一打に切り付ける」と云ふ床の文句の二三分も前に切り付けたり、淨瑠璃の文句にかまはず引込んでしまつたり、大道具に例をとれば布四の幕開きにもう小櫻をしばる繩が紅葉の枝にかけてあつたりする、此れ等總合的に櫓下に責任を持たせたいと思ふ。

亦淨瑠璃の意味や登場人物の性格等に就ても、理解の不足な人形遣にはせめて其の語り場の意味だけでも說明して望しいと思ふ。

五月の文樂座

西尾福三郎

今月の興味の主たるものは榮三の遣ふ女人形が二つも出てゐる事である。二十四孝の越路と鏡山の尾上、何れも座頭格の人にして初めて完璧を期し得る女人形である。總體に榮三はこの頃女物を餘り出さなくなつたが、この人の品位と氣格とで見せなければならぬ女武道物が外にまだ〳〵澤山あるのだから、女物と云へば文五郎と紋十郎の獨壇場みたいに思つてゐる見物の蒙を啓く爲にもこの人の正しい女物の良さを精々今の內に幕內幕外を通じて改めて再認識をさせておく必要がある。

ところで一番目の二十四孝は綱造の絃を主に、それに七五三太夫の勘助と玉幸改め玉助の改名祝儀の持役を配さうとした爲の狂言立てと受取れる節があるので、自然第一義的に吟味されたものとは思はれない。從つて勘助物語の段を七五三太夫の勘助、呂賀太夫のお種の外は各役に二人乃至三人交代と云つた割り方である。この場は一人の太夫がドッシリと入念に肚をもつて語つてこそ生きれ、かうした散文的演出にしてしまつてはカラ印象のないものに墮してしまふ。七五三太夫の勘助も聲に任せて喚き立てる許りで勘助の肚がない。折角綱造との組合せを得たのに、もうそろ〳〵よい芽が見えさうに思へるのだが一向上達の氣配も見受けられぬのは何うした事か。この責の一半は綱造の絃にもある筈である。人形の方も榮三の越路、文五郎のお種、紋十郎の慈悲藏、光之助の唐織と何れも一と通りで平凡。

第二は鬼界ケ島。これは織太夫團六の獨演である。最初の豫定では前月の水漬く屍が引續いて上演される事になつてゐたが、二ケ月續演は罷りならぬと云ふ御法度で急に上演を中止したとの事である。特別攻撃隊の材料取扱方法に愼重を期される意味はよく分るが、特に人形劇だからと云ふので一ケ月だけ上演を許可されて、これで寬大な取扱ひださうであるから他は推して知るべしである。それはともかくも、水漬く屍が鬼界ケ島に搗き代つた意義は充分、急場とは申し乍ら織

太夫としては勉強になる演し物である。却つて女人筋からは喜ばれてゐるだけでも努力甲斐があると云ふものだ。これは文樂座が現在の場所で初開場の時古靱が語つてからこの方久しぶりの上場で、衣鉢繼承の意味で將來は織太夫團六の賣り物になつていゝ作品である。忌憚なく云つて未成品の域を脫して居ないが、その責の或部分は時間制限をうけてカットにカットを加へられた點にあるのかも知れない。總體にこの人は近頃音遣ひが非常に巧くなつた事を感ぜしめる。舞臺はお約束の靑竹てすり、今度は見すかしでなく、その下にげこみのやうなはめ板を立てゝゐる。〳〵もとよりこの島は鬼界ヶ島ときくなれば……と話がくりのオキがあるところのカカリは島の景淸と同じ行き方で壯重な出の氣分である。その間無の間があつて一調が入り、漸時語りになつて行く氣分描寫は、普通の淨瑠璃ではザラに見られない節々で、こゝいらの叙述にこの全段を象徵した氣分描寫があり、然して次に海女の出るあたりから舞臺上の色彩が加はると共にグッと世話に碎けた趣が描かれてゐるのだが、惜しむらくはその邊の大事な文學的部分がカットされたので殘念乍ら期待しただけの效果は現はされてゐなかつた。三味線もこの場の氣分を彈くのはむつかしいらしく、今遽かに團六に完全性を求めるのは無理だらう。猶ついでに書添へておくと、この場に三悪四趣、三悪道と、以上二度三悪と云ふ言葉が出てくるが、前者はカット後者は三ヶ道と織太夫は語つてゐた事を斯道の論者方に報告しておく。俊寛の人形は偉風堂々たるもので、これに瀨尾の怪異な頭と、千鳥の可憐さと、以上三つの變つたカシラに加ふるにまだ種々のカシラが揃ふのだから、海、岩組、大船と云つた變化のある背景色彩の妙と相まつて、單に人形芝居としてのスペクタクルとしての興味の點から見た許りでも、この場の價値は相當高く評價されていゝ筈である。いつかよい機會を得て、より以上に完全な錬磨によつて立派な演出を見せて貰へる日を期待したい。

第三は鏡山の七ッ目、前の廊下を大隅、長局を古靱、そして奥庭を和泉と云つた割で受持つてゐる。慾にはこの前に草履打ちを唯附けると筋が通つて初めての客にも理解が早かつたらうし、尾上その人の死の動機も現實感を伴つて迫つて來やう。

さて先月、椎の木で好調を示した大隅が、又々廊下を語つてよい出來を見せてゐる。一見この人に柄にないやうな持場のやうにも思へるが、こゝは岩藤さへ生かせたら爾餘のものはさ程の苦心も入るまい——要するに端場の味であつて（椎の木も同斷）何れにしても鷄肋たる事に變りはない。端場を生かす事は無論大事であり、技巧としても忽せならざるものを要する事は認めるに吝かでないが、猶今日のこの人にはそれ以上に大切な勉强のある事を忘れて貰つては困る。一段語

つて遺がに大隅も巧くなつたと思はせるものを久し振りでゝたいものである。人形では玉造の岩藤がこの人らしい感じを出してゐて面白かつた。古靱の長局は立派な完成品で本年に入つてから恐らく隨一の出來榮だつたと思ふ。一體二月堂の良辨杉や、菅原の道明寺や、又は鏡山の長局と云つたしんみりしたものに特に傑出した味を示すこの人の淡雅な持味は故津太夫などとは全く對蹠的に考察さるべきであつて、この兩者を同架に列して同じ目安で評價するのは一寸見當外れである。强烈な迫力と野性とをもつて押しつけてくるやうな津太夫の表現力と、そしてこの人の我れも人も倶に娛しみ哀しませるやうなやわ〳〵と行屆いて綺麗に整ひ澄んだ表現法には淨瑠璃と云ふものゝ根本的な把握の相違があるのではなからうか。同じ文學的な作品を取扱つても演出の解釋で全然異つた舞臺效果を見せる事があるやうに、この兩者の演出の相違を論ずる人が、不知不識の裡に演出過程のヴエールでもつて作品の本質まで押し包んでしまつて見過つてゐるやうな錯誤に陷つた論評を間々耳にする事がある。更に蛇足を附加するなら、それは田舍藝術と都會藝術との違ひ方にも似てゐる。田舍者は都會藝術の眞味に到り得ないし、都會人は田舍藝術の面白味に同化出來ない。一と口に藝と云つても水の違ひと料理法とで同一材料を扱つても同じ舌觸りには出來上らない所に板場のコツがあり、それがまた料理人のミソでもある譯だらう。敢て津を田舍藝、古靱を都會藝と論斷するのではない、これは一つの物の喩へとして引用したのである。さう考へてくると沼津や熊谷陣屋には兩太夫それ〳〵獨特の持味が浸み出てゐて何れも結構であるが、さらに志度寺あたりになると古靱では津太夫の味に及ばないし、その反對に今度の長局になると、これは又その反對に津太夫では全然想像されない藝域である。この兩者のカッキリした分野をこゝらに於いて考へてみる時、この長局は古靱藝術の頂天を示す一高峯なのではなからうか。

更らに尾上の人形に榮三の名技を得て、清六の絃と相まつて、三者の渾然たる融合の妙を發揮してゐた點に注目すべきである。人形のみについて考へてみるに、この場は廊下の段で岩藤とお初との間に女らしからぬせり合ひ（或は女らしいとも云へやうか）があつた後、尾上とお初の二人限りの場面となり、こゝで尾上はぢつとしてゐるに反しお初の方は動きすぎる程動き廻つて引込んでしまふと、後は又尾上一人の淋しい場面となる。この淋しい沈んだ暗愁の中に死の前の述懷が恻々としてきく者の身に迫るやうで〳〵蔭見送つて……から……〳〵佛間へさして日も西へ……迄の數十分の一人舞臺の間が無類の出來である。かう云ふ一見單調な場面になつて殊更ら人を惹きつけるこの技巧は一體何から來るのであらうと私はいつもこの事を考へさゝれる。熱でもない。無論單なる

技巧ではさらにない。一種の氣格と透徹した魂の迫力——さう云つた精神美であり、能樂に於ける無の間にも比すべき空間的なリズムがグツと力強く支配してゐるからである。氣品の點では清六の絃も擢でゝゐるし、又榮三の人形がその端正な型と愼重な動きとで隨時隨所に獨特のいゝ形をみせ、きまり型で儲けるやうな厭味を見せない事が何よりよかつた。一體に二月堂でも鏡山でもその文學的價値の點では他の諸作に比して遙かに低位にあるものが、太夫、三味線、人形の統一的な演出によつてはかく迄見事に昇華させられる所に藝の魔訶不思議な力を感ずると俱に、義太夫の面白味をしみ〴〵と味はひ知らしめられるのである。

外に、酒屋と、切りは雪月花と銘打つて鷺娘、關寺小町、義士櫻とがあるが餘り長くなるのでこの邊で擱筆しておく。

藝道と時局

——古靱古夫のことなど——

伊藤紅二

日本の藝道と云ふことについては、色々の說が成立つ樣に思ふ。

之に哲學的な基礎づけをすると可成、體系的なものも成立つのであるが、こゝで自分はふと、日本の武士道と云ふ樣なものとの相關について多大の興味をおぼえて研究の歩をすゝめて居る。

×

それは扨ておき、かつて、新聞の劇評に、高麗屋の「勸進帳」を評した中で、「幸四郎の辨慶の限りに於て、師匠九代目のそれを眞に祖述し、顯現するもの幸四郎に如くはなし」と斷定して、それは彼幸四郎が、其の藝道の上に於て如何にも律義で、殊に、かの勸進帳に於ては特にそれが著しく、今では千何回と云ふ上演回數を保持して此の點ではまさに師匠を凌ぎ、又藝境に於ても出藍のほまれあり、何れの點からも

勸進帳のレコードホルダーであるにかゝはらず、常に師匠をたつとぶの念深く、この點著しく胸をうたれるものがあることを述べたものだ。

更にそれに附加して、師匠と弟子、卽ち主從と云ふ關係に於て、九代目と高麗屋の格式に於てさも似たるものあり、主を鞭うつあの心根は、まさに弟子の師匠に對する心でもあることを、些か素强附會かも知れないが、意味づけてみたものである。

×

然し、今はそれに及ばうとは思つてゐない。たゞこうした主從、師弟の關係と云ふものが日本藝道に及ぼす影響と云ふよりは、それ自體が藝道形成の一のエレメンツでもあると云ふことに言及したいのである。

そして、それは甚だしく論理の飛躍にもなるが、古靱太夫の藝術に於て、藝道の一要素とも思はしきものについて考察してみたいと考へたのだ。

×

古靱太夫につき、其の語り口や、其の得意とする十八番物の範圍などについては、筆者など些か同じ難いものをもつてゐるし、紋下としての格式の上から見て、苛酷と思はれるしもとも、時にふりあげ度い氣持ちをもつものではあるが、其の人格の點や、律義さに於て、一點非のうち所のないと云ふ所に非常にうたれるものがあることを先づ述べる。

×

家庭的には高等學府まで仕おふせた三人のむすこに夭折されたりして、必ずしも、惠まれた人とも思はれぬにかゝはらず、それを超克したあの堂々たる人格の圓滿さ、しかも生活的にも、相當苦境にあつたことも知つてゐるが、それすらも其の藝術の上には微塵も見出し得ない餘裕がある。

特に、太夫が合三味線の野澤清六との夫婦仲の睦さに於てはまさに琴瑟相和すものがあることを力說する。

この點は前の紋下津太夫が、何人とも知れぬほどに紘の女房をかへたのとは、まさに好對照であらう。

それに弟子の點に於ても、津太夫には播路太夫、津賀太夫と粒の人もゐるにはゐるが、離合集散常なしと云ふ狀態が續いたのに比して、古靱は織太夫以下殆んどその膝下から、はなさないと云ふ人間的の魅力をもつてゐる。

この點も日本藝道の上からは忘脚出來ないことである。

×

此處で、死馬に鞭うつ如く、津太夫をひきあひに出してこれは甚だ相すまぬとは思ふが、それは又、藝術の上におのがじしの行き方があるものであつて、つまりはその人のにんにあること、津太夫が又、つけ燒刃的な宋襄の仁の樣なことをしたのでは又、藝術の墮落であり、それなりけりであるが、

尠くも、古靱はあの生活態度、人生觀、藝術的良心と云ふようなものからわり出して、自己の好伴侶、門弟に對する態度はまさにかくあるべしの感を深うする。

×

そも〳〵先代越路太夫が攝津大椽となつた時に、その紋下問題は當然、津太夫、古靱の上にふりかゝつたものだ、古靱は立派に先輩に之をゆづる態度を示したことは藝界に於ては美談でもあつた。

それ以後は二人でもつことをかつぐ調子でよくこの紋下を松竹興行會社と云ふ似ても似つかぬ殺風景な名題から奪還してこゝに義太夫藝術の獨立を見事なしとげたその功績は、後世これ又美談としてのこる所であらう。

子弟に對する情愛と云ふことについては稍々述べた。又、其の清六との名コンビたることについてもふれたのだが、清六が又えらいと思ふ。

×

一ころ清六は、豪奢な旅館經營までしてゐたことがあつたが、何でも清貧に甘んじてゐる亭主格の古靱の爲に惜しげもなくサラリと賣拂つたと云ふ美談もつたへられてゐる。

元來、紋は何處までも追從的、伴奏的の意味のものであるから、眞の藝道の奥義をきはめれば素語りでよく人を感動せしめる位の境地をかもし出すのが理想であらうが、然し現在の所、太棹の通念から云へば太夫と絃は夫婦同志であり初代越路ほどの野天で「太十」を三年も語つたと云ふ自信の持主でさへ、十分に三味は重んじた所を見ても、古靱清六の名コンビは末始終添ひとげさせてやり度いと今更の如く希望する。

由來、この新体制下に於ては、新に日本精神の格別なる昂揚が要請せられ、隨つて、その根幹をなすとも云ふべき國體觀念の明徴は云はずもがな、之が培養素ともなつた武士道精神、主從關係、師弟關係、夫婦同志、隣組精神、同志同行的態度はこの上とも振作高調せねばならぬときに當つて、新紋下古靱太夫の披露は大いに意義がある様に思ふ。

×

聞けば、非常に信心深くて、この點では信仰即藝術即生活の境地にまで到達してゐると云ふことだから、この時局下になほ更たのもしい氣がする。

あの赤貧——と云つてはやゝ誤弊もあるが——の中から陸海軍への寄附なども忘れない、と云ふことを聞いては時局認識のほども察せられて近頃會心の極みである。

其の得意とするものに特に「親子の情」をモチーブにするものを拾ひ上げられるのもうれしい話である。

東京出演に際してあられもないことくど〳〵と書き立てた御免。（筆者、評論家）

明治座の新綾之助

内田三千三

補助椅子の出た一階を視野に入れて、第二部から聽く。

染登…「酒屋」

「巧い女義」として染登は衆目の「定評」を持つ。

「冴えた實力」と「放膽な舞台度胸」を具備し乍ら鷄鳴會以前は藝術的環境が稍不遇であつた。

「實力」と「人氣」が正しく評價されぬ寂しさを一洙感じさせた。

しかし小仙を中心に、鷄鳴會結成以降は漸次人氣が加重して來た。

藝術的には、正統派であり、「氣骨」と「卓力」を持つ此の人の前途へかける期待は大きい。

染登の「酒屋」は宗岸が女義なれのした表現で一見識だ。

圖靜枯淡な寂しさに淡いが、我が娘を想ふ眞實心をクッキリと描き出す。

「俺も天滿」……にを少しもモタつかす、サラリと云つてしかも餘韻を殘らせる、それとお國を世話に碎けす「生娘」で演出するのが心憎を摑んでゐる。

クドキになると、揆念自在、急所々々を「カン」と「突込み」でエグつて行く、一杯に突込み乍ら、臭く聞かせぬのも鍛錬の腕だ。

狼幸の紘は艷も情愛もあつて秀調だが、惜し哉、無情感が淡い、殊に彈き出しの數行に、黄昏の闇にうづく傷魂を滲みさせ度い。

土佐廣…「岡崎」

伊達子から土佐廣へ甦生して以來、藝にめつきり「幅と深さ」が付いて來た。蕾來艷物畠から藝進して「女土佐」の風格を築きつつある眞摯な精進は好感持てる。鷄鳴會で聽いた「引窓」なぞ豫想以上の秀作だつた、其處で「岡崎」も期待したが、今度は比較的凡打に終つた。

藝質と語り物がマッチせぬ恨がある。

演出は眞險で、敬虔な努力を傾注するが、政右衛門に壯烈な氣韻が薄く、幸兵衛も枯淡な氣骨が熱出しない。大きく性格も堀り下げやうとする演出が無理を生んで、情懷渾然と迫らなかつた。

僅かに「苦い挨拶」……に味があるのと「相ごうは」……の次の間が食ひ入るやうに老師の赫顏を見つめる深韻を漂はす。

それと切り場の「盡きぬ師弟の遠州行燈」……に土佐廣らしい垢拔げた詩情があつて雪の夜の「師弟の奇遇」を潤描した。綱助の紘は性根が据つてゐて危氣がない。

激烈にタタミ込んで行く「ゐのこ投げ」の邊り、迫力ある正格な良さを出した。

「心も清き洗ひ米」……の邊り雅韻がある。

今後この人に望むものは水墨畫に見る如き「仙境」である。

それと先輩を引き合ひに出して洵に失禮だが、僕の直ぐ前に、石井現外先生が肅然たる懷かしさで、二代目の舞台を靜聽されて

ゐた。

人生蒼茫

轉々。今昔の感を禁められて……ありし日の初代の威大な藝跡を追憶されてゐたであらう。老先生の心境を愚かにも忖度して、艶麗な舞台の底に、故人の見えざる藝光を心感した。

小津賀 …「油屋」

油屋の演出は一歩誤まると歌舞伎化する惧れがある。詞の多いこの世話物は人物個性を浮彫にする爲めに、ともすれば臭く成り易い。

小津賀は、お紺と貢に滋味があろ。ベタつかずサラリと表現し乍ら潤ひのある巧味がある。

お紺の憂愁を持つ心をしつとりと陰影を含くませて密描する演出のキメが細かい、貢も「身不肖なれど」……の濃りがキツパリしてゐて、しかも内炎する情愁を色濃く出す。

貢はこれをキツパリ演らぬと萬次郎と混同する。

貢、演出上の此處を「儉」としたい。

喜助の意見はこの人に珍らしく少しモタついた。一洋の臭さゝへあつたのは、意外だつた。

サラリとした裸に「氣骨」と「眞情」を參じませ度い。

「足を踏みしめて段梯子」……で切つたのは小津賀らしい好みで、世話物らしい、小味な餘韻を鮮出した。

掛合 …「吉野山道行」

女義にして、文樂の本業紋十郎を使ふのは豪華である。

其の經濟的負擔の並々ならぬことは想像に餘りある。觀聽者は悦々として此の一幕を見守つてゐた。しかし、演出成果は、

……第三、文五郎の名技を知るものにはあだかも羽左—菊五郎の「吉野山」を家橋—訥升で見る如き色褪せた幻滅を感じる。

紋十郎—玉助も一種り器用だが、結果的には「踊る人形」を一歩も出ない。殊に「放す矢先にあへなくも」……が、紋十郎、玉助ではケレン染みてすゝ、深い心韻が漂はぬ。

出語連名が大連の爲め、書割前の舞台一面を總床にしたのも、長唄物の所作事染みて、義太夫劇獨得の立體感を稀薄にした。

それと書割は櫻花爛漫、春色の吉野山だが、上手に櫻の木を飾らぬは風情を創ぎ、舞台全體が平面的ノーペラ棒になつた。春情靄々たる吉野山に人外忠信の靈氣を復都と芳ぐはしてこそ、この道行は呱々たる興趣が湧く。

ひつくるめて番組上に「足使ひ」と「左使ひ」を明記した企劃が「殊勳甲」である。

綾之助 …「先代」

初代綾之助を聽いて感激した夜……始めて二代目綾之助を聽いた。正直な所、その頃の二代目は「美貌の麗人」とは思つたが藝はヒドク平板で巧味の無い美摩主義で戴けなかつた。

從つて……二代目の印象は只「綺麗な女義」と云ふ以外、さのみ藝術感銘は與へられなかつた。其の二代目を佳照と云ふ名で女義後援會で再聽した時別人のやうに驚かされた。

色付だけで甘味に乏しい「イチゴ水」のやうだつた藝が何時の間にか「ポンカン」のやうに水々しい滋味を湛へて來たからである。

勿論、佳照の藝は語るより唄ふ、音樂美

豊かな淨瑠璃だが、腹の薄さを巧妙なネバりでカバーする技風と、ウンネリとした美韻が特徴である。

明治期の大女義、初代綾之助の高名を、昭和に傳へる適格な後繼者であると倶に、「美」と「夢」の義太夫を大成させる能材である。

呂太夫の眞摯な口上を丁て……綾之助再襲名の披露淨瑠璃「先代」が流暢に展開された。

二代目の美點と短所は「萬年花形」と云ふ感に集約される。

千からびた强線と、イキム熱臭が微塵もなく、水々しい潤質と、艶美さを把持してゐる。

卒直に云へば……政岡が「情の政岡」になつて、烈女の氣魂に乏しかつた。

其の代り此の曲の持つ、美しい音樂性の方は多分に出せた。

清列な氣品より、優雅な氣韻と柔軟性が物を云つて、樂々と、しかも餘韻を殘して調插した。

會報 消息

▽增田喜城氏　京都平安會に出演後五月廿日夜發病、京都帝大に入院中の處日に增し經過良好。

▽湯淺光玉氏　東都五十義會にて東大關に昇級、その祝賀義太夫會を七月八日正午より並木倶樂部に開催。

▽蛭子　錦氏　同五十義會にて入賞七月十五日正午より並木倶樂部に於て祝賀會開催。

▽鶴澤紘平連、七月九日正午より夕刻迄並木倶樂部にてお盆義太夫會を開催。

▽佐藤巴偶氏　龍昭改め巴偶氏は六月十三日夜交正倶樂部に於て改名披露義太夫會を開催。義太夫古曲發表會の後援出演、花輪、座布團等の贈物あり て頗る盛會を極めた。赤坂並木（彌次郎兵衞、猿喜知。喜多八、扇之助。和尙、和孝。小僧、親爺、松市郎。紘、駒登太夫、ッレ、駒榮）山名屋（巴昇、巴太夫）　合邦（巴偶、巴太夫）　挨拶（巴偶）阿古屋（阿古屋、巴太夫。重忠、朝見太夫。岩永、駒登太夫。榛澤、卯太夫。紘、芳太郎。琴、美之助。胡弓、扇之助。ッレ、松市郎、猿喜知、和孝）

▽翼　扇　會　第二回を六月十六日正午より、並木倶樂部に開催。千兩幟（おとわ、和孝。猪名川、猿喜知。鐵ケ嶽、松市郎。大阪屋、呼出し、紘內。紘、駒登太夫。胡弓、扇之助）八陣（扇華）太十（喜久壽）鮨屋（一光）濱松小屋（茂玉）忠六（一六八）梅由（登盛、新造）岸姫（美谷古、扇之助）赤垣（鯨世花）佐太村（彌聲）壺坂（叶）紘（扇之助、ッレ、紘內、扇華）

▽義太夫翼會　第十九回を六月廿日午前十一時より並木倶樂部に開催。酒

屋(白猿)壺坂(三由)本下(大嘉津)堀川(山門)紘(猿藏、ツレ、猿三郎、琴、松四郎)次回は九月廿六日同倶樂部に開催。

▽淨曲長生會　第三回を六月廿五日正午より松坂屋ホールにて開催。宿屋(以與子、良造)柳(佳津子、綾之助)新口(六花、清一)野崎(喜鳳、道之助)弁四孝狐火(愛水、綾之助、琴、佳世子)妙心寺(正鳳、道之助)合邦(乃菊、綾之助)長局(山生、鹿重)

▽素玄淨曲研究會　第四十六回を六月廿七日午後六時より相互倶樂部に開催。忠九(花房、紘平)寺子屋(貴昇、猿藏)堀川(悟堂、猿藏)梅由(都太夫、新造)次回は七月廿七日同倶樂部

▽三　好　會　第十二回を菊川倶樂部に開催。日吉(喜三香)寺子屋(津滿子)辨慶(時昇)太十(三好彈語り)第十三回九月廿三日相互倶樂部に開催。

▽第二回巴會　六月二十九日正午より並木倶樂部に開催。堀川(與次郎、松市郎。母、和孝。傳兵衛、猿喜知。お俊、扇之助。紘、駒登太夫、ツレ、駒榮)松玉(巴菊)寺子屋(壽笑)河庄(巴壽々)合邦(巴偶)山名屋(巴昇)寺子屋(巴洲)紘(巴太夫)

▽女義若女會　雷門東橘亭にて四十七回(六月一日)白石(津賀重)蝶八(素八、播磨一)油屋(住若、清一)太十(素次、素八)新口(越駒、津賀昇)四十八回(六月十五日)辨慶(津賀重)鳴戸(素次、素八)安達(素廣、駒登久)赤垣(小和光、清三)合邦(素八、播磨一)四十九回(七月一日)玉三(津賀重)鮨屋(素八、播磨一)小磯(小津賀、紋敎)辨慶(素次、素八)吃又(猿春、三生)

▽東都女義後援會　六月廿八日午後四時より並木倶樂部にて第廿九回を開催。鈴ヶ森(駒榮、佳世子)朝顏(佳世子、綾作)戀十(染登、猿幸)先代(越駒、津賀昇)酒屋(綾作、金衛)安達(住若、清一)質店(彌周、三生)太十(昇登、綱助)

▽因協會技藝奬勵會　日本因協會は文樂座若手太夫三味線人形の技藝奬勵會を組織し、その第二回公演を六月廿二、三の兩日午後三時より文樂座にて開演した。初日(安宅關、朝顏日記、川中鳥、鮨屋)二日目(安宅關、朝顏日記、重の井、鮨屋)出演太夫(源太夫、千駒太夫、津賀太夫、三瀧太夫、南次太夫、松島太夫、つばめ太夫、呂賀太夫、越名太夫、織太夫、田喜太夫、隅若太夫、利根太夫、伊勢太夫、雛太夫、文字太夫、伊達太夫)三味線(勝芳、龍風、友三郎、團作、清和、仙三郎、仙松、叶太郎、吉藏、團六、清友吉季、清廣、德若、綱延、一郎右衛門)入形(紋司、榮三郎、門次、紋太郎、紋之助、龜松、光之助、玉德)

▽靜　淨　會　別揭の如く六月廿六七兩日大會を開催した靜淨會は七月六日夜文化倶樂にて有志會を催ほす。

第三十六回 東都五十義會採點表

審査

安藤 光樂　吉田 三芳
長谷川文久　高瀨 操

會長 細川清
副會長 高瀨操

| | | |

太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報導致します。開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。特種の催ほしの外前書きを略します。番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。掲載順不同。

（太棹社）

兜會義太夫大會

開戰以來自肅休演をづゞけて來た兜會は、會長鈴木松寶氏が昨秋關西旅行の途次不慮の災禍に遭遇後一層謹嚴自戒を守つてゐた處、赫々たる皇軍の武勳は征く處敵なく僅かにして米英の領域大半を制壓するに至り、又鈴木松寶氏も健康恢復、それこれ慶祝の意を表して六月七日午後一時より並木倶樂部に於て左の番組に依り賑々しく義太夫大會を開催した。

車引（時平、春栄。松王、美浪。梅王、和光。櫻丸、もみぢ。杉王、三葵。）忠六（加保留、龜造）合邦（高玉、鶴助）忠四（和光、新兆）沓掛（團壽、和光）太十（松寶、良造）安達（美峰、猿之助）―挨拶（會長）―曾我對面（工藤、美浪。五郎、泉。十郎、其昌。近江、もみぢ。八幡、加保留。虎三葵。少將、錦。朝比奈、可笑。梶原和光）揚屋（錦、鶴助）先代（三葵、猿平）陣屋（春樂、松四郎）酒屋（朝正、猿平）寺子屋（三幸、良造）紙治（清華觀西翁）又助（巴、猿藏）濱松屋店先（駄右衛門、美浪。辨天、團壽。南郷、可笑。番頭、和可葉）

淨曲梅鉢會夏季大會

梅鉢の紋を代々受け繼ぐ人々に依つて本年二月廿五日天神講を卜して誕生した「淨曲梅鉢會」は六月廿五日午前十一時より並木倶樂部に於て夏季大會を開催。出演者の見臺、肩衣いづれも揃へも揃つた梅鉢の紋どころ、今回より島うつぼ、同春子、乾小桔梗氏等新加入、左記多數出演の下に聽衆も滿員の盛況を呈した。

油屋（お紺、里芳。貢、彌聲。萬野、喜香。喜助、吳光。岩次、扇華。北六、蝶花。お鹿、叶。絃、扇之助）松王（彌聲、扇之助）沼津（喜らく、勝助）本下（吉樂、鶴助）太十（豊國、道之助）

慶辨（吳光、新造）先代（里芳、勝助）八陣（扇華、扇之助）酒屋（雅樂、勝助）寺子屋（神風、道之助）忠六（都平、都太夫）白石（宮城野、小桔梗。しのぶ、春子。絃、龜造）團七內（子太郎、和孝）佐太村前（喜香、猿喜知）同奥（義昇、龜造）十種香（都昇、都太夫）毛谷村（蝶花、勝助）沼津（桔梗、龜造）湊町（都雀、巴丈）杏掛（叶、扇之助）佐太村（うつぼ、龜造）合邦（合邦、桔梗。母、義昇。玉手、叶。俊德丸、蝶花。淺香姫、子太郎。入平、吳光。絃、猿藏）

蛙聲會結成

小石川區富坂二丁目の素義人白井清華、富岡生昇、田中都十、安藤都昇氏らに依つて蛙聲會が結成され、六月四日夕、小石川倶樂部に第一回を開催した。當夜は蛙聲會の會名らしく雨であつたが、文字通り立錐の餘地なき超滿員で、富坂町會の應援賑々しく小石川倶樂開場以來の滿員の盛況であつた。

太十（都仙、都太夫）玉三（かなめ、都太夫）酒屋（都十、都太夫）壽司屋（清華、猿玉）安達三（都昇、都太夫）野崎村（生昇、猿玉、ツレ、彌周、玉惠）

第四回 義太夫靜淨會

靜岡縣人並びに同縣にゆかりある人々を以て結成した「靜淨會」は六月廿五日その事務所たる京橋時田靜史氏方にて懇親會を開き、出席者三十餘名、今回は靜岡の外濱松、清水等より新人多數參加して益々會の基礎をかため、翌廿六、七の兩日午前十一時より雷門並木倶樂部に於て第四回大會を開催したが、同會の技藝顧問竹本大隅太夫は折よく東上中とて二日間とも早々と來聽、演者の質問に答へ大に奬勵する處あり、出演者は頗る力演、滿場聽客の縣人は一人毎に拍手應援非常な盛況を極めた。

【初日】柳（翠瓢、綾秀）伊賀五（靜史、猿平）鮨屋（美翠、新兆）新口（生昇、都太夫）合邦（自笑、文俊）安達（喜玉、鶴玉）又助（治光、綾秀）辨慶（濱松、はじめ、廣駒）寺子屋（勝駒、越駒）引窓（濱松、國榮、廣駒）陣屋（喜香、猿喜知）志渡寺（梅月、廣三）忠六（清水、聲保、綱助）酒屋（綾登、綾秀）松王（伊東、たから、龍太郎）鮨屋（清水、安樂、綱助）太十（薰秋、友五郎）宿屋（靜岡、嬌聲、龜造）毛谷村（龍司、綾秀）長局（濱松、自樂、三平）忠四（壽瓢、綾秀）赤垣（濱松、和聲、三吉）忠九（桔梗、綱助）

【二日目】日吉（翠瓢、綾秀）堀川（靜史、猿喜知）逆櫓（聲保、綱助）辨慶（勝駒、越駒）太十（紀鳳、綾秀）佐太村（喜香、猿喜知）梅由（蟻若、清司）

玉三(はじめ、廣駒)紙治(痴樂、猿喜知)安達(美翠、新兆)沼津(司光、綾秀)陣屋(清水、錦昇、廣駒)太十(清水、湊、龜造)岸姫(淺路、綾之助)蝶八(未成、綱助)十種香(喜城、猿喜知)鈴ヶ森(蝶花、勝助)陣屋(力、猿平)忠六(和聲、三吉)酒屋(靜岡、壽松、綱助)合邦(壽瓢、綾秀)先代(自樂、三平)吃又(靜翠、扇之助)陣屋(竹史、清吉)

第一回 京濱素義美名登會

橫濱の重鎭田中呑笑氏は東都五十義會の出演に備ふべく、同會開催前の春秋二回、橫濱にてその試演大會として「京濱素義美名登會」を組織し、五十義會、中老會、金港花くらべ會後援の下に、六月の五十義會直前五月廿九日正午より長友倶樂部に於て左記多數の出演者を以て第一回大會を催ほした。今回第廿六回五十義會に橫濱より九名の出演者を見たのも田中氏の努力に外ならぬものである。當日の番組を左に

忠三(師直、盛鶴。判官、春和。若狹之助、桔梗。伴內、がん昇。本藏、呑笑。紘、紘內)太十(市菊、福彌)安達(一廣、綾之助)陣屋(一昇、綾之助)忠九(花房、紘平)陣屋(北壽、若好)布四(呑笑、紘平)陣屋(千晴、道之助)寺子屋(がん昇、綱助)太十(美竹、雷米)毛谷村(津城、重吉)吃又(乃菊、綾之助)阿古屋(光玉、綾之助)阿漕(駒司、昇之助)沼津(古清、綱助)

大關昇進並に入賞

祝賀義太夫大會

東都五十義會第卅五回にて東關脇に昇進した杉本花房氏は今回第卅六回に於て、西大關の榮冠を獲得、東都氏も又入賞し、いづれも鶴澤紘平連の事と岸姫(淺路、綾之助)戀十(其柳、道之助)引窓(桔梗、綱助)太十(喜照、綾之助)帶屋(金壽、駒登太夫)布三(都、紘平)河庄(枝蝶、綾之助)寺子屋(松巴、季美太夫)忠三(松玉、駒登太夫)太十(壽昇、駒登太夫)太十(榮王、若好)草履打(扇柳、若好)七段目(由良之助、桔梗。九太夫、呑笑。重太郎、春和。喜多八、都。亭主、其柳。お輕操。仲居、久瑠和。力彌、紘吾。彌五郎、がん昇。伴內、盛鶴。平右衞門、千晴)紘(道之助)

なほ秋季大會も同樣五十義會開催前に開催。申込事務所(橫濱市中區永樂町一丁目田中源次方)

て同連中の榮譽此上なく、六月廿三日正午より並木倶樂部にて祝賀義太夫會を開催、聽衆は定刻前より押しかけ頗る盛會を極めた。當日の番組左の通り。

合邦（合邦、春和。母、吾鈴。入平、文盛。玉手、巽。絃、絃平）油屋（春和）紙治（ひばり）柳（菊水）阿漕（冠之）儀作（千年）佐太村（米司）安達（文盛）太十（巽）岡崎（隅斗）大晏寺（盛鶴）挨拶―鮨屋（糸子）逆櫓（吾鈴）伊賀五（都）鳴戸（松玉）布四（呑笑）忠九（花房）野崎（久作、春和。久松、文盛。下女、節子。母、盛鶴。お光、糸子。お染、ひばり）絃（絃平。ッレ、絃内、絃吾、小絃）

大日本素人淨瑠璃會採點表

大阪に於ける大日本素人淨瑠璃競演會第十七回採點表左の通り。

信濃（一八六、三）生樂（一八六、一）金聲（一八六、〇）重司（一八二、三）和十（一八一、九）タツミ（一七三、五）義鳥（一七一、〇）鶴笑（一六八、一）貴道（一六六、四）登一（一六三、一）鶴峰（一六二、八）松鳳（一五九、四）楓江（一五八、四）榮四（一五七、四）うろこ（一五七、〇）紅司（一五六、九）小富士（一五六、六）里昇（一五一、一）あしべ（一四九、九）光友（一四八、六）素呂離（一四八、〇）きく水（一四七、五）華遊（一四五、八）まつ尾（一四四、六）花住（一四四、三）幸遊（一四三、六）長登（一四三、四）一蝶（一四三、〇）五勢（一四二、四）得谷（一四二、三）十九壽（一三九、九）住之助（一三九、〇）藤政（一三八、九）鳳玉（一三八、六）榮絲（一三七、九）呂鳳（一三七、三）小昇（一三六、五）大彌（一三六、五）大和（一三六、五）長生（一三五、七）千司（一三五、三）松呂（一三五、三）ナゴン（一三三、八）白水（一三三、四）野鳳（一三三、四）晴山（一三二、八）鳴門（一三二、五）東升（一三二、五）義若（一三一、八）吳山（一三一、四）やなぎ（一三〇、九）翠松（一三〇、八）透昇（一三〇、八）和鳳（一三〇、六）駒一（一三〇、六）駒平（一三〇、〇）筆子（一二八、九）愛石（一二八、一）雅樂（一二七、六）山玉（一二七、五）吟青（一二七、四）千歲（一二六、五）花昇（一二五、九）三島（一二五、六）榮鳳（一二四、五）河桝（一二四、三）はじめ（一二四、一）鐵洲（一二四、〇）米友（一二三、九）古城（一二三、八）敷島（一二二、八）南北（一二一、六）暫（一二一、四）小里昇（一二一、三）花月（一二一、一）いろは（一二〇、〇）錦司（一一九、七）二笑（一一九、五）芳玉（一一九、三）光鳳

（一一七、九）喜昇（一一六、六）美よし（一一六、三）一孝（一一六、三）鳴門（一一六、二）一鳥（一一六、〇）都華（一一六、〇）音琴（一一五、六）喜鳳（一一五、五）彌昇（一一五、〇）司（一一四、〇）正鳳（一一三、九）紫保（一一三、五）まる一（一一三、〇）可祝（一一二、六）竹司（一一二、四）一港（一一二、〇）都（一一一、九）紫雲（一一一、五）臥笑（一一〇、三）つばめ（一一〇、三）集樂（一〇九、八）無節（一〇九、六）榮昇（一〇九、六）吉乃（一〇九、三）日石（一〇七、九）京彌（一〇七、六）こま井（一〇七、六）好鶯（一〇七、五）鬼外（一〇六、四）梅昇（一〇五、六）榮助（一〇四、五）登號（一〇四、一）竹峰（一〇三、〇）みなと（一〇二、六）富玉（一〇〇、三）東關（九七、三）寅囃（九六、九）松鶴（九五、三）紅雀（九四、〇）清司（九一、六）無審査出演横綱（利生）、東大關（信濃）、關脇（金聲）、小結（和十）、西大關（生樂）、關脇（重司）、小結（タツミ）、優秀賞（一等可祝。二等吉乃。三等竹峰）賞狀（日石、花佳、竹司）、團體賞（豊竹勇昇連）

歸國吟

車中

（一月）

第一信吹雪の驛に書きにけり
朝灯淡し水上吹雪きをり

越後湯澤

山小屋の一つ新らし雪の朝

新潟

雪晴れの明るさ畫心新らたなり

寺泊にて

（三月）

佐渡の灯が見えるといふや春の宿
風高し佐渡は春行く波の上

富岡にて

（五月）

屋根に垂るゝ杉の太枝五月雨
さみだれとなる大杉の木立かな

大河津

驛長と暫し話しぬ行々子

沼田驛

（六月）

赤城指して地形を語る扇かな

吉田にて

大樺どさと伐られて明易き

富取芳河士

後本援誌名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

小川氏　吉田氏　安藤氏　中澤氏　佐藤氏　宮内氏　北島氏　佐藤氏　西野氏　和田氏　中村氏　菅田氏　橋本氏　阿部氏　森内氏　櫻井氏　吉川氏　關口氏　關口氏　荒木氏　高瀨氏　鈴木氏　木村氏　水戸部氏　廣瀨氏

都登山氏　く盛氏　ほくろ巴氏　ほくろ助氏　北巴氏　巴春氏　白梅氏　梅六氏　呂浪氏　與一氏　一一氏　一一氏　いづみ司氏　いろは氏

西田氏　高橋氏　加藤氏　飛石氏　青山氏　林木氏　鈴木氏　本子氏　金馬氏　林守氏　神本氏　河米氏　松原氏　岸方氏　久々氏　栗山氏　緒橋氏　保友氏　堀熊氏　外野氏　高藤氏　國都氏　大平氏　安藤氏　安都氏

可松氏　可遊氏　和兜氏　和めし氏　和曉氏　大勢氏　里樂氏　林熊氏　里松氏　痴昇氏　千芳氏　竹樂氏　中鳥氏　千史氏　千次氏　長鶴氏　とき晴氏　わ平氏　彌氏　富東氏　東都氏　都都氏　都昇氏　竹氏　好氏　光氏　仙氏　平氏

福岡氏　篠山氏　岡本氏　山石氏　本中氏　石水氏　中乃氏　倉村氏　田鹽氏　下うつ氏　城原氏　川田氏　野口氏　村子氏　小島氏　乃萩氏　太川氏　新井氏　坂杉氏　野根氏　小井氏　田小氏　大須氏　八岩氏　米黒氏

又山氏　彌彌氏　冠華氏　吳乃氏　月素氏　太素氏　二高氏　團氏　林太氏　倉山氏　上田氏　本口氏　森辰氏　叶用大嘉氏　賀佳津氏　木勝氏　崎がん氏　澤雅氏　川

糸門氏　聲氏　生之氏　笑氏　羽昇氏　菊潮氏　ぼば涯氏　郎美氏　鳳遊氏　橘尾氏　壽八氏　巽氏　壽昇氏　津子氏　駒昇氏　樂氏　叶氏

寺奥氏　坂本ある氏　影山牧川氏　藤中淺愛氏　柳及有氏　大淺井築川氏　淺堂野藏前寺鐵天氏　寶桑原崎田永圓氏　岡中崎島五向氏　山中谷口陽氏　保中淺中紅廣氏　田湯岡野光湖氏　松河田越語國氏　原安鈴木兒光氏　安部富士登氏　上川杉文盛氏　長谷川二三文樂氏

岡村三三幸玉氏　を氏　路氏　路氏　氷氏　明氏　旭氏　葵氏　花氏　幹氏　昇氏　樂氏　六氏　口氏　平氏　司氏　笑氏　玉氏　月氏　松氏　聲氏　巴氏　樂氏　雀氏　久氏

木村さかえ氏　齋藤平次郎氏　橋本三司氏　藤井榮生氏　山田清壽氏　細川鳳金氏　金田錦松氏　錦織聲梗氏　淺野星奇氏　岡田貴桔氏　野島本歸世氏　星山歸軌氏　淺田井外氏　錦織平月氏　金田橋乾氏　細川增喜氏　藤田增城氏　橋本增梗氏　平井乾月氏　齋藤橋外氏　平次郎氏　木村さかえ氏

吉村有玉氏　三坂義昌氏　山田義昇氏　吉良蟻若氏　岩木義雀氏　麻生田喜らく氏　荒木キヨ氏　澤部其角氏　和田金扇氏　部田鏡鳳氏　三浦田喜氏　增田城香氏　增田梗城氏　乾桔梗氏　橋本掬月氏　平井軌外氏　歸山本花氏　岡世岡氏　野島昇氏　星貴梗氏　淺野奇聲氏　錦田金松氏　金田鳳氏　細川清氏　藤田壽氏　橋本三氏　平井三氏　齋藤司氏　平次郎榮氏　木村さかえ氏

西保村游史氏　吉坂曲氏　三田鳳氏　山田昌氏　吉良昇氏　岩木若氏　麻生雀氏　荒木田ヨク氏　澤部角氏　和田扇氏　部田鳳氏　三浦田氏　增田喜氏　增田香氏　增田城氏　乾梗氏　橋本梗氏　平井月氏　歸山外氏　歸山花氏　岡世岡氏　野島昇氏　星貴梗氏　淺野梗氏　錦田聲氏　金田松氏　金田鳳氏　細川清氏　藤田壽氏　橋本三氏　平井三氏　齋藤司氏　平次郎榮氏　木村さかえ氏

池田原美尚氏　桑原美峰氏　福安瓢登氏　平山平茶氏　高品一重氏　武笠宏亮氏　高瀨靜氏　永野風氏　西内平氏　打矢水氏　濱口華氏　倉田樂氏　田口重氏　山田瓢氏　花房蝶氏　菊地月氏　龜田花氏　伊藤鶴氏　小松樂氏　鈴原寶氏　須木義氏　村田美豆氏　上美津氏　吉田三芳氏　池田三國氏　北村三葵氏　野口みと氏　橫井三由氏　吉田美地句氏　高瀨操氏　岩田末成氏

池田傍島紀鳳氏　桑原國森鳴門氏　福安田島集樂氏　平山小林榮玉氏　品田中呑笑氏　笠和田香雀氏　瀨木朝氏　靜保良鈴氏　內川奈鳳氏　矢口部銀氏　口岡十八公氏　田源氏　司峰氏　華紫氏　樂西氏　重廣氏　瓢玉氏　蝶岳氏　月（地方之部）　花仁氏　鶴德氏　樂三氏　寶江氏　義時氏　豆沼氏　芳富氏　國的氏　葵井氏　と佐氏　由近氏　句白氏　操松氏　成魚氏

同平塚川口　同同同　橫濱下關　船橋大垣　神戶大阪　同同　米國　同同同

當座帖

▽田畑千壺氏　病氣靜養中。

▽加藤壽松氏　靜岡市加藤壽松氏は目下新築中。

▽高瀬　操　目黒區上目黒五丁目六二七番地へ轉居。電話澁谷三〇四二

▽竹本三勝師　綾作と改名。

編輯後記

★本號は文樂座東京出開張特輯として皆樣の御愛讀を願ふ事に致しました。

★本號編輯に當り文樂座新櫓下豊竹古靱太夫に就いて諸先生の御希望を伺ひ上げました處、御多忙中にも不拘御回答を賜りまして、この特輯を飾り得ました事を深謝致します。

★杉山田庭氏、西村游史氏、その他の玉稿は記事輻輳の爲め次號にまはさせていただきました、何卒御諒承を願ます。

★先日、島東吉氏に逢ひました時、文那の紙芝居に就て御寄稿を約しました。島氏は時々滿鮮地方へ旅行をして、新京で此の紙芝居を見て面白く感じたといふ事です。

★五月六月は大會が續き或は新生の會も催ほされましたがいづれも盛會で、語り物も時局に應しいものが多く選ばれた事はうれしい極みであります。

★五十義會終演後のいろ〳〵な投書は每度のことでありますが、匿名は勿論沒書とし住所氏名を明記されたものも紙面の都合で揭載をお斷りして、今回は特に返送致しました。

★採點の不正や、會に誤謬のある場合は五十義會に不拘、素玄にらす、如何なる會でも機關誌たる弊誌が筆を執る事は申す迄もありませんが、投書は調査した上でなければ揭載致し兼ねます。今後も左樣御承知をきを願ます。

★娛樂は娛樂のやうに、紳士は紳士のやうに、圓滿にやつてゆきたいものであります。

★そろ〳〵猛暑となります。皆樣の御自愛を祈ります。　―富取生―

第百三十六號　（每月廿五日發行）

定價　一部　金三十錢　郵稅一錢
六月分　金一圓八十錢　郵稅共
一年分　金三圓　郵稅共

廣告料　普通　一頁　拾圓
特別　一頁　貳拾圓

▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なるべく振替に御送金の事
▼郵券代用一割增

昭和七年六月二十三日印刷納本
昭和七年六月二十五日發行

東京市小石川區音羽町一ノ一四
編輯兼發行人　富取壽鹿

東京市小石川區指ヶ谷町四
印刷人　杵淵五郎

東京市小石川區指ヶ谷町四
印刷所　柏葉社
（東九一三八二）

東京市小石川區音羽町一ノ一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

昭和十六年三月廿八日　第三種郵便物認可
昭和十七年六月廿三日　印刷納本
昭和十七年六月廿五日　發行
（毎月一回廿五日發行）

文樂座人形淨瑠璃

七月一日初日五回替　新橋演舞場

第一回（一日――五日）

景事二人禿　禿（雛太夫）禿（津賀太夫、越名太夫）ツレ（津賀太夫、越名太夫）（松島太夫、呂賀太夫）（友衛門、吉左）吉季、勝芳、一郎右衛門、團作。

伽羅先代萩　御殿（呂太夫、仙糸）（織太夫、團六）政岡忠義（南部太夫、重造）（伊達太夫、勝平）

妹背山婦女庭訓　道行戀の小田卷（お三輪、呂太夫、織太夫）（橘姫、南部太夫、伊達太夫）（求女、つばめ太夫、司太夫）宮太夫、隅若太夫（つばめ太夫、司太夫）仙糸（勝平、重造）團六、清友、一郎右衛門、清廣。

一谷嫩軍記　熊谷櫻（大隅太夫、清二郎）陣屋（古靱太夫、清六）

攝州合邦辻　合邦住家（前、相生太夫、吉五郎）（後、七五三太夫、綱造）

第二回（六日――十日）

義經千本櫻　道行初音の旅（南部太夫、伊達太夫、七五三太夫、其他掛合。綱造）川連法眼館（相生太夫、吉五郎）（織太夫、團六）

艷容女舞衣　酒屋（前、相生太夫、吉五郎。織太夫、團六）（後、南部太夫、重造。伊達太夫、勝平）

繪本太功記　尼ヶ崎（中、呂太夫、仙糸）（切、古靱太夫、清六）

傾城反魂香　吃又平（大隅太夫、清二郎）

音羽春日月　團子賣（雛太夫、つばめ太夫其他掛合）

第三回（十一日――十五日）

生寫朝顏日記　宿屋（南部太夫、重造）（伊達太夫、勝平、琴、勝芳）大井川（南部太夫、重造。伊達太夫、勝平）

良辨杉由來　志賀の里（相生太夫、吉五郎。ツレ、吉季、八雲、勝芳、勝友）櫻の宮（呂太夫）（伊達太夫、南部太夫）（津賀太夫、司太夫）（宮太夫、越太夫）松島太夫、呂賀太夫、隅若太夫（仙糸）（勝平、重造）（友衛門、吉左）（一郎右衛門、團作、清廣）東大寺（雛太夫、友衛門）（つばめ太夫、吉左）二月堂（古靱太夫、清六）

日吉丸稚櫻　小牧山（大隅太夫、清二郎）

壇浦兜軍記　阿古屋（阿古屋、織太夫）重忠、（七五三太夫）岩永（雛太夫、つばめ太夫）榛澤（宮太夫、越名太夫）綱造、ツレ、團六、琴、勝芳、胡弓、清友。

人形　吉田榮三、吉田文五郎、桐竹紋吉郎、桐竹門造、桐竹政龜、吉田玉造、吉田小兵、吉田玉助、吉田榮三郎、吉田玉德、其他

太棹（第百三十六號）
（定價㊨參拾錢）